禅語録を読むための基本語彙初稿

古賀英彦

緒言

そのむかし、禅文化研究所の唐代語録研究班に、入矢先生が講師として見えられたほとんど当初から、研究会の末席につらなるという幸運に私は恵まれた。唐代の語録をいくつか読み進むあいだ、私は先生のおっしゃることをひたすらテキストに書き込んだ。主として口語の語義・語法に関することがらである。ある時ひまにまかせてカードに移してみたら、かなりの数になった。そのうち、何の因果か、私はいわゆる禅語というものをまとめる仕事に携わることになった。しかも、数年後、申し分けないことに先生をもその仕事に巻き込むことになってしまった。おかげで原稿のすべてに朱を入れていただけることにはなったが。

またいっぽうで、花園大学の学生諸君と語録の初歩的なものを読むようにもなって、教場に出て痛感したことは、学生諸君にとって適当な手引がないことであった。そこで、表現にかかわる語彙がある程度まとまったのをしおに、ひとつ手書きにしてコピーを作り、学生諸君に分けてやろうと殊勝な決心をした。そこまではよかったのであるが、私はどうも自分の書いた字を眺めるのが嫌いである。さりとてこんな辛気臭い仕事とても人に頼めたものではない。手を拱いているうちに、禅学研究に原稿を書く当番が廻って来た。最初のうちこれはこれで別

に考えていたのであるが、手書きじゃなしにいっそ活字にしてしまったらどうだとふと思い付いたわけである。ちょっと姑息だが、難題が二つも一挙にかたづくことになった。

凡　例

一、語の配列は字の音の五十音順による。原則として漢音を用い、呉音・唐音など慣用にしたがう場合には指示する。

例、作→そ

二、引証に用いた文例の出拠について段落を指示したものは、左のテキストによる。

宛陵録　入矢義高『伝心法要・宛陵録』

神会録　鈴木大拙全集第三巻所収

大乗無生方便門　宇井伯寿『禅宗史研究』所収

伝心法要　宛陵録に同じ

頓悟要門　岩波文庫本

臨済録　岩波文庫本

（敦煌本）六祖壇経　Philip B. Yampolsky: the platform sutra of the sixth patriarch. 所収

あ

阿　接頭語。疑問詞の前、「阿誰」「阿那」「阿那箇」「阿那裏」。親しみをこめて、「阿婆」「阿你」「阿嬢」「阿郎」「阿爺」。いささか軽蔑をこめて、「阿師」。

阿誰（アスイ）　たれ。〔祖堂集十六南泉章〕師示レ衆曰、王老師要レ売レ身、――買。

阿那　選択疑問詞。どれ、どの。下に「箇」を伴うこともある。〔祖堂集十八趙州章〕――是維摩祖父。〔臨済録勘弁十九〕十二面観音、――面正。

阿那箇　〔臨済録勘弁十五〕師問二楽普一云、従上来、一人行レ棒、一人行レ喝、――――親。

阿那裏　どこに。〔祖堂集三慧忠章〕生縁在二――一。

阿你　なんじ、きみ。〔伝心法要十一〕可中心即倶忘、――便擬下向二何処一覓去上。

い

……已不　句末について疑問を表わす。「以不」「也無」「也未」などと同じ。〔祖堂集三司空山本浄章〕問、見有身心是道――。師曰、小僧身心本来是道。

已来　ばかり、ほど。「以来」と同じ。〔趙州録上〕年至二八十一、方住二趙州城東観音院一、去二石橋一十里――。

……以不　句末について疑問を表わす。「已不」「也無」「也未」などと同じ。〔祖堂集十五帰宗章〕莫二是俊機白侍郎一――。

伊摩　「与麼」に同じ。〔祖堂集八竜牙章〕正――時行二鳥道一。

異没　「与麼」に同じ。〔神会語録八〕――時作物生。

為……為……　選択疑問の句法。……か……か。「為復」の項を見よ。〔祖堂集三智策和尚章〕入レ定者、――有心入レ定耶、――無心入レ定耶。（定に入るというのは、有心で定に入るのか、無心で定に入るのか）。〔同慧忠国師章〕未審心与レ性――別不レ別。（一方の「為」が省略された形）。

為……為復……　選択疑問の句法。「為復」を見よ。〔祖堂集三慧忠国師章〕我今問レ汝、譬如二皇太子受レ位時一、――太子一身受二於王位一、――国界一一受也。

為……所以……　……のせいで、……だから。〔臨済録示衆一〕祇――情生智隔、想変体殊一、――輪廻三界一、受二種種苦一。

為什麼（なにとしてか）　なぜ、どうして。「什麼の為にか」と訓じるのが正確。〔祖堂集十一雲門章〕師問レ僧、作二什摩一。云、掃二仏身上塵一。云、既是仏、――――却有レ塵。（「什摩」は「什麼」と表記の違いのみ。）

為甚（なんとしてか）「為什麼」に同じ。〔雲門広録下〕――レ――義堕。

為是　二字で「……である」の意。繋辞。〔維摩経仏道品〕居士、父母妻子、親戚眷属、吏民知識、悉――二――誰一。〔臨済録示衆九〕你取二一般老師口裏語一、――二――真道一。

為当（はた）　二字で「（……なのか）または……なのか」という二者択一を問う疑問詞。「為当……為当……」と重ねて用いる場合も多い。また「為当」の代りに「為復」というこ

ともある。「為復」を見よ。〔伝灯録六馬祖章〕師問二百丈一、汝以二何法一示レ人。百丈竪二起払子一。師云、只這箇、――別有（これだけなのか、それとも別にあるのか）。百丈抛二下払子一。

為当……為当……　選択疑問の句法。「為復」を見よ。〔祖堂集十二黄竜章〕有二一句子一、如レ山如レ岳。有二一句子一、如二透網魚一。有二一句子一、如二百川水一。――是一句、――是三句。

為当……為復……　選択疑問の句法。「為復」を見よ。〔祖堂集三司空山本浄章〕――求レ仏、――問レ道。

為復（はた）　「為復a、為復b」は、aであるかbであるかという選択疑問の句法。「為復」は「いったい」とか「そもそも」くらいの意味。下句の頭におく「為復」を省くこともあり、また上句の方で省くこともある。また「為復」は「為当」と言い替えることもあり、「為復a為当b」と交互に用いることもある。これの最も簡略な形式は「為a、為b」である。（入矢義高『伝心法要・宛陸録』七〇頁）〔伝心法要十一〕――即凡心是仏、即聖心是仏。

為復……為復……　前項を見よ。〔祖堂集三慧忠国師章〕一切人仏性、――一種、――有レ別。

一種　同じ（形容詞）、同じく（副詞）。〔正宗賛二五祖演章〕――是声無限意、有レ堪レ聴、有レ不レ堪レ聴。（道忠和尚曰く、声は是れ一味なるに、かえって堪うると堪えざるとの両般有り、と）。

一等　①「一般」と同じく、ある種の不特定多数。〔寒山詩〕世間――流、誠堪二与レ人笑一。②同じ、同じく。〔投子語録〕――是水、為二什麼一海鹹河淡。師云、天上星、地下水。〔四家語録黄檗章〕――学レ禅、莫二取次妄生一異見一。

一般　①ある種の。「一等」ともいう。〔臨済録示衆七〕有二――学人一、向二五台山裏一求二文殊一。早錯了也。②「一種」に同じ。同じ、同じく。〔伝心法要十五〕法身従レ古至レ今与二仏祖一――、何処欠二少一毫毛一。

因什麼　なぜ、どうして。「為什麼」「縁什麼」と同じ言い方。〔祖堂集七巌頭章〕既然如此、――不レ肯二山僧一。

恁　その、そのような。そのように。文語の「如此」に当る。「恁麼」「恁的」「恁地」とも熟字する。〔広灯録十四西院思明章〕専甲不レ説二一時錯一。

恁麼（インモ）　「与麼」に同じ。五代以後多く用いられるようになる。〔伝灯録五南嶽讓章〕祖曰、什麼物――来。

う

有等～　「有一等～」の略。一等は一班・一輩・一般と同じで、不特定多数をいう。「～のやからがいる」という意。〔虚堂録続輯〕――瞎驢一、不レ弁二精麁一。

有般～　「有一般」の略。～という連中がいる。〔碧巌録九本則評唱〕――底人一道、本来無二一星事一。〔大慧書答劉宝学〕――杜撰長老一、根本自無レ所レ悟。

え

贏得～（かちえたり～）　せいぜい～に終る～となるのが落ち

だ。勝ち取った・せしめたという積極的な語気ではなく、得たものといえば結局これだけだという意。〔杜牧詩〕――青楼薄倖名。〔雲門広録上〕千差万別、広設二問難一、――一場口滑、去レ道転遠。

お

応須　～しなければならない。〔祖堂集十一保福章〕古人有レ言、欲レ達二無生路一、――レ識二本源一。

応是　①きっと～でしょう。名詞に冠して「あらゆる」「すべての」の意となる例とは別。〔祖堂集十七溟州嶺山故通暁大師章〕如レ此瑞祥実未二曾有一。――禅師来儀之兆一也。②すべての、あらゆる。「多是」ともいう。〔敦煌本六祖壇経三五〕――迷人了然便見。

応当　～しなければならない、～せよ。〔祖堂集七巌頭章〕如是如是、――善護持一。

枉　口語で、いたずらに、むなしく、の意。文語としての「まげて」とは別。〔伝心法要二〕造レ悪造レ善、皆是著レ相。著レ相造レ悪、――受二輪廻一、著レ相造レ善、――受二労苦一。〔臨済録示衆十八〕瞎漢、――消二他十方信施一、道二我是出家児一、作二如レ是見解一。

か

可可　多少、いくらか。また、かなり、相当に、の意の俗語。「可可地」も同じ。〔伝灯録二八南泉語〕如未二出家一時、曾作二什麽一来。且説看、共レ你商量。曰、恁麽時某甲不レ知。師曰、既不レ知、即今認得――是耶。〔寒山詩〕昔時――貧、今朝最貧凍。

可計　～ばかり、～ほど。〔祖堂集十五大梅章〕僧問、居レ此多少年也。師云、亦不レ知二多少年一。只見二四山青了又黄、青了又黄一。如レ是――レ三十余度一。

可殺　はなはだ、ひどく、したたかに。「殺」は「煞」とも書く。〔祖堂集十四馬祖章〕我今日――頭痛、不レ能二為レ汝説一。〔伝灯録二十華厳処真章〕――炎熱。

可煞　〔碧巌録一本則著語〕――明白。〔虚堂録一瑞岩録〕――性燥。

可瞰　「可煞」に同じ。〔広灯録二三洞山暁聡章〕――泥水。

可惜許（カシャクコ）　おしい！　おしいなあ。「許」は語助。〔祖堂集四丹霞章〕僧云、秀才去二何処一。対曰、求レ選レ官去。僧云、――、功夫何不二選レ仏去一。

可笑　すばらしい、楽しい、愉快だ、の意と、嘲笑しておとしめる意とがある。後者の場合は、説教調の詩偈の冒頭に決まり文句として現われる。〔寒山詩〕――レ寒山道、而無二車馬蹤一。〔伝灯録二九大乗讃〕――レ衆生蠢蠢、各執二一般異見一。

可中（もし）　「もしも」という意の俗語。従来これを「可の中」と訓じ、「箇中」「箇裏」と同義に解しているのは誤り。「可中」については、豊田穣『唐詩研究』、張相『詩詞曲語辞匯釈』などに例証がある。（入矢義高『伝心法要・宛陵録』七一頁）〔伝心法要十一〕即若不レ即、心亦不レ心。――心即俱忘、阿你便擬下向二何処一覓去上。〔碧巌録四本則評唱〕――有二

箇漢、牙如二劒樹一、口似二血盆一、一棒打、不レ回レ頭、他時異日、向二孤峯頂上一、立二吾道一去在。

可不　文語の「豈不」に当る。〔伝灯録二八南泉語〕――レ省レ力。

仮饒（たとい）　二字で「たとい～しようとも」の意。〔祖堂集十四百丈章〕師垂語云、古人挙二一手一、竪二一指一、是禅是道、此語繫二縛人一、無レ有二住時一。――不レ説、亦有二口過一。

仮使（たとい）　二字で「たとい～しようとも」の意。〔祖堂集十九臨済章〕師曰、於二一棒下一、入二仏境界一。――百劫粉骨砕身、頂擎二須弥山一、経二無量市一、報二此深恩一、莫レ可二酬得一。

何似　「何如」に同じ。①どうだ。「いかん」と訓じる。「何似生」ともいう。〔祖堂集四薬山章〕師巻二却経一、問二白顔一、日勢――。対曰、正当二午時一。②二つのものを比較して、前者は後者にくらべてどうだと問うときに用いる（後者の方がましではないか、という含みの場合が多い）。そのときは「～にいずれぞ」と訓じる。〔祖堂集十六南泉章〕師又時拈二起毬子一、問レ僧、那个――這个一。

何似生（いかん）　「何似」に意味のない接尾語「生」のついたもの。「A何似B」のように二つのものを引きくらべる働きはなくなり、単に「どうだ」の意となる。〔祖堂集十八趙州章〕師云、還見二老僧一也無。対云、見。師云、見――。対云、似二一頭驢一。

何如（～にいずれぞや）　「何似」の②に同じ。～にくらべてどうだ。〔南泉語要〕如今多有レ人喚レ心作レ仏、喚レ智為レ道、見聞覚知皆是道。若如レ是会者、――演若達多迷レ頭認レ影。設使認得、亦不二是汝本来頭一。

何当　いつか、いつかは～したい（そうなりたい）という願望をこめて言うのが普通。散文よりも詩に用いることが多い。〔碧巌録一頌著語〕――弁レ的。

何等　どんな、どのような、の意。〔歴代法宝記下保唐寺無住章〕汝但辦レ心、諸天辦レ供。――心辦。不レ求二心辦一、不レ貪二心辦一、不レ受二心辦一、不レ染二心辦一。〔祖堂集二十五冠山順之章〕遊子問曰、普賢大士寄二――一位。仙人答言、寄二因五位乃至果位一。

何得（なんぞ……することをえたる）　どうしてそんなことが許されるのか、よくもまあそんなことができた。してはならぬことをした時の詰問の語。「不得」に近い。「那得」ともいう。〔祖堂集五雲巌章〕師掃レ地次、叫寺主。問、師――二自駈駈一。

何必　どうして～する必要があるのか、なにも～することはあるまい。〔祖堂集四薬山章〕師曰、智闍梨――有二此問一、……不レ用二更問一。〔同十一保福章〕師曰、汝是悪人。僧曰、――（そうでもないですよ）。

何妨　ひとつ～してみたらどうか、～したっていいではないか。〔祖堂集四薬山章〕這裏有二肉身菩薩一出世、兼是羅漢僧造二院主一。――上レ山礼拝（お山にのぼって礼拝されてはいかがですか）。

何物（なに）　単に「何」の意。〔資治通鑑巻一六六梁紀〕他日、

帝謂三道徳一曰、我飲レ酒過、須三痛杖レ我。道徳扶レ之。帝走。道徳逐之日、――人為三此挙止一。〔伝心法要八〕問、如何是道、如何修行。師云、道是――、汝欲三修行一。

家→け

～過　動詞の後に附加して、ある地点から他の地点への移動を表わす。「穿過」「透過」「勘過」「決過」「差過」「放過」「飛過」など。

会是（もし）　二字で「もし」の意。仮定を表わす。→会也。〔最上乗論〕――妄念不レ生、我所心滅、一切功徳、自然円満。

会也（もし）　もし、もしもの意の俗語。仮定を表わす。用例は極めて少ない。→会是。〔二入四行論長巻子〕――融レ心令レ使レ浄、驚起即便是生滅。

看　～してみなさい。句末について丁寧な命令または勧誘を表わす。「試みに～し看よ」という句法も同じ。また「ひとつ～してみよう」と、本人自身の意思を表明する場合もある。〔祖堂集二弘忍章〕行者曰、某甲不レ識三文字一、請兄与レ吾念―。

看看　みるみるうちに。〔睦州録〕上堂云、汝等快与快与、老僧七十九也、――脱去也。

喚作　～と呼ぶ、～と名づける。現代中国語の「叫」または「叫做」と同じ。〔洞山録〕師問下講三維摩経一僧上云、不レ可三以レ智知一、不レ可三以レ識識一、――三甚麼語一。僧云、讃法身語。師云、――三法身一、早是讃也。

敢保　「敢えて保せんや」と反語に読むのが普通だが、禅録ではそうならなくて、「あえて保証する」の意になることがしばしばある。〔祖堂集十長慶慧稜章〕你若択得、許レ你有三這个眼一。你若択不レ出、――你未レ具レ眼在。

還　「いったい」とか「そもそも」という意で、軽く問いかけの語気を添える場合と、「それでも」「やはり」という意で、逆接を表わす場合とがある。どちらであるかは文脈によって決まる。〔祖堂集十九陳和尚章〕問、祖意教意、―同別。〔同十一汐潭章〕―是勿交渉。

還……不　疑問の句法。〔祖堂集四石頭章〕師却問、和尚在三曹渓一時、―識三和尚一―（曹渓和尚の顔を見ましたか）。

還……麼（摩）　最も一般的な疑問の句法。「はた……や」と訓ずる。以下の三例も同じ。〔祖堂集十一保福章〕雲峯云、―会―。

還……無　疑問の句法。〔祖堂集十一斉雲章〕文殊与摩道、―称コ得長老意一―（文殊がこのように言ったのは、あなたの意にかなったか）。

還……也未　疑問の句法。〔祖堂集二弘忍章〕師又去三碓坊一、便問レ行者、不易行者、米―熟――（米は搗けたかね）。

還……也無　疑問の句法。いったい……か。〔無門関一〕狗子―有三仏性一――（犬にも仏性がありますか）。

元来　なんと。期待はずれ、意外さの気分を表わす。〔祖堂集十五帰宗章〕師剗草次、有三一座主一来相看。忽見三一条蛇一、師便鑵断。座主云、久嚮三帰宗一、――只是麁行沙門。

き

其中　そこ、このところ。場所をいう。禅家ではこの語をもって、究極のもの、本来的なものを意味させることが多い。同義語として「箇中」「彼中」「箇裏」「那辺」がある。〔趙州録中〕問、夜昇二兜率一、昼降二閻浮一、――為二什麼一摩尼不レ現。〔同上〕問、衆機来湊、未レ審――事如何。師云、我眼本正、不レ説二――事一。

洎　ほとんど、あやうく、すんでのところで。〔碧巌録四六本則〕鏡清問レ僧、門外是什麼声。僧云、雨滴声。清云、衆生顛倒、迷レ己逐レ物。僧云、和尚作麼生。清云、一不レ迷レ己。

洎于　～におよんで、～となって。〔祖堂集十七雙峯道允章〕――二長慶五年一、投入二朝使一、告二其宿志一。

洎乎　～におよんで、～となって。〔祖堂集十七嶓山梵日章〕――二大和三年中一、私発二誓願一、往遊二中華一。

洎合　二字で、ほとんど、あやうく、すんでのところで、の意。「洎」「幾合」「幾乎」に同じ。〔祖堂集十四馬祖章〕今日不レ遇二和尚一、――空過二一生一。

～起　動詞について動きが上に向うことを表わす。「竪起」「提起」「蹻起」「拈起」「撩起」「抬起」「架起」「蹺起」など。

貴　ひとえに、もっぱら。李白の詩に見える「貴欲」も、「ひたすら～せんと欲す」の意。〔祖堂集七夾山章〕――持二千里抄一、林下道人悲。〔同十三報慈章〕伝二持従上祖宗一、――得二相承一、不レ令二断絶一。〔敦煌変文双恩記第十一〕――満二父母之憂憐一、兼救二生霊之貧困一。

幾何（いくばく）　どれほど、いくら。〔祖堂集六投子章〕有レ人問曰。凡聖相去――。

幾箇　いくつ。〔伝心法要十一〕你有二――心一。

幾合　ほとんど、あやうく、すんでのところで。「幾乎」と同じ。〔洞山録〕――放過。

幾時　いつ。〔祖堂集十八趙州章〕問、栢樹子還有二仏性一也無。師云、有。僧云、――成仏。

幾曾（なんぞかつて）　文語では「何曾」。～したことがあろうか。〔碧巌録四頌評唱〕――是放過来。

既　動かせない既定の事実のあることを示す助字。～であるからには、～である以上は、～であるのに。〔祖堂集十一保福章〕因挙、曹山云、仏一説二一言一、五百害心生。如何是此言。師云、冷侵侵地。進曰、一有二此言一、為二什麼一、却返レ怨。

既若　すでに、もし。～であるからには、～であるのなら。〔祖堂集四薬山章〕師曰、受戒図二什摩一。対曰、図免二生死一。大師曰、有二一人一不二受戒一而遠二生死一。阿你還知也無。対曰、――如レ此、仏在レ世、制二二百五十条戒一、又奚レ為。

既是　「既」に同じ。〔祖堂集十長慶慧稜章〕問、師子捉レ象亦全二其力一、捉レ兎亦全二其力一。――全レ力、為二什摩一救二善星一不レ得。

既然　「既」に同じ。〔祖堂集十一睡竜道溥章〕僧問レ師、玄沙豈不レ是不レ諾二雪峯一。師云、是也。僧云、――如レ此、請師代二雪峯一対二玄沙一。

虧～　宋代以后の俗語で、～のおかげで、の意。ただし左に挙げる祖堂集（唐末の編纂）の用例は、この意味にあてはまる

ようである。「～によりて」と訓じてよい。〔祖堂集十一保福従展章〕有人問、不レ弁二諸塵一、如何端的。師云、――二汝問一、即道。進曰、与摩即学人有レ頼去也。師云、山鬼屈レ汝自作得。

擬～　～しようとする。文語の「欲」に当る。「擬欲」ともいう。〔祖堂集十七西院大安章〕僧纔―レ開レ口、師打レ之云、這野狐精。

擬議　ためらう、口ごもる。〔臨済録勘弁二一〕僧――。師便喝。

擬欲　二字で、～しようとする、の意。「意欲」「欲擬」ともいう。〔洞山録〕師問二雲巌一、―ニ―相見一時如何。雲巌云、問ニ取通事舎人一。〔祖堂集四薬山章〕問、学人―ニ―帰レ郷去一時如何。

却　①心理や行為の意外さや屈折を表わす。ところが、今度は。〔龐居士語録〕不レ作二道理一、―成レ作二道理一。②あとで、のちに。〔趙州録上〕師少時間、―去礼謝云、適来謝二和尚相救一。以上「かえって」と訓じる。③動詞の後について意味を強める。〔証道歌〕証二実相一、無二人法一、刹那滅ニ―阿鼻業一。④動詞の後について「除く」の意をそえる。〔雲門広録上〕問、如何是禅。師云、拈ニ―一字一得麽。

却後　あとで、そののち。六朝以来の古い俗語。「却」も後の意。「爾雅」釈木の注に「枌榆は先に葉を生じ、却(のち)に莢を著く」とある。宗代以降は用いられなくなった。〔祖堂集十六南泉章〕道吾在二方丈外一立、聴下聞他不二領覧一、不中覚知上、咬レ舌得レ血、――去問、……。

久嚮（ひさしくむかう）　かねてから一度お目にかかりたいものと景慕しておりました、という意。つとに敬意を抱いていた人との初対面の時に言う挨拶。誤って「久響」とも書くが、これを従来「久しく……と響く」と読み、「御高名は久しく鳴り響いておりました」と解するのは間違い。〔祖堂集十鏡清導怤章〕見二新到参一次、拈ニ起払子一。対云、――鏡清、到来猶有二紋綵一在。

久響　「久嚮」を見よ。〔趙州録中〕問、――二趙州石橋一、到来只見二掠彴子一。

及以（および）　名詞と名詞をつなぐ接続詞。～と～。→「及与」。まれに「及於」とも書く。与・於は「以」と音通。〔法華経提婆達多品〕普為二諸衆生一、勤ニ求於大法一、亦不レ為二己身、――五欲楽一。〔歴代法宝記下〕今時律師、説レ濁説レ浄、説レ持説レ犯、作レ相受レ戒、作レ相威儀、――飯食皆作レ相。

及至　～になると、～になるに及んで。〔祖堂集三慧忠国師章〕譬如下寒月結レ水為レ氷、及レ至二暖時一、釈レ氷為上レ水。

及与　～と（前置詞）。また接続詞にも用いられ、古くは「及以」と書かれることが多く（羅什の漢訳など）、また時には「及於」とも書かれる（外典では「及以」でなくて必ず「以及」）。〔了性句〕吾有二方寸珍一、―ニ―世間人一不レ同、鑽レ之即大出、聴レ之即大通、海水飯二毛孔一、須弥納二介中一。

休　返答につまった、二の句が継げなかったという意に取るべき場合も多いが、これで十分として対話に終止符を打ったという意に解すべき場合も少くない。（入矢義高『龐居士語録』

五六頁。〔臨済録行録三〕師侍立徳山一次、山云、今日困。師云、這老漢寐語作二什麼一。山便打。師掀倒繩牀一。山便一。

急手　いそいで、すぐさま、とるものもとりあえず、の意の俗語。「急首」とも書く。〔南泉語要〕曰、和尚恁麼道、教二学人一如何扶持得。師曰、你——托二虚空一著。

～去（～しさる）　①或る動作を進行させる意思を表わす助字。～しに行く。〔趙州録下〕師問二一新到一、上座曾到二此間一否。云、不二曾到一。師云、喫茶一。②論理的な帰結を表わす。～という結果を導くことになる。〔頓悟要門下二五〕若無情是仏者、大徳如今便死、応二作レ仏去一。

許多般（そこばく）　あれやこれやの、くさぐさの。〔伝心法要十四〕道人是無事人、実無二——心一、亦無二道理可レ説。

渠　三人称代名詞。かれ。禅録ではおもに「主人公」を指すのに用いる。〔臨済録示衆九〕一且不二是修底物一、不二是荘厳得底物一。

挙→こ

共～　ちょうど英語の前置詞 with に当る。～と。「～とともに」と読まない方が良い。〔伝灯録十八竜冊道怤章〕要二一レ汝商量一。

況乃　いわんや～をや。〔祖堂集五雲巌章〕闍利瞥起、草深一丈、——有レ言。

況復　いわんや～をや。復は意味のない接尾語。〔祖堂集十二禾山章〕古人有レ言、擬心則差、——有レ言。

恐是　おそらく。〔祖堂集三慧忠国師章〕——此児子異二於常人一也。

強如　「強如……」は比較級の句法で、「……よりもすぐれる」という意。「強似……」ともいう。これらの反対は「弱如」（弱似）。如・似は文語の「於」と同じ。（入矢義高『龐居士語録』三七頁）〔龐居士語録〕峰一日与二居士一並行次、士乃前二行一歩一日、我一二師一一歩。

極其　きわめて、非常に、という意。「極めて其れ」と読んではならない。「其」は意味のない語助。

け

～家　①～の側（がわ）、～の次元、～の立場、という意。「～辺」というのに同じ。〔南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語〕定不レ異レ慧、慧不レ異レ定、如二世間燈光不二相去離一。即レ燈之時光一体、即レ光之時燈一用。②また意味のない接尾語。「他家」「人家」「傍家」「仏家」「和尚家」など。

解　～できる、という意味の場合がある。文語の「能」に同じ。たとえば楊貴妃は「解語花」と呼ばれたが、それは〝ものいう花〟の意である。つまり「解語」とは、ものを言うことができる、口をきくことができるの意。〔伝灯録六石巌慧蔵章〕因逐二群鹿一、従二馬祖庵前一過。祖乃迎レ之。蔵問、和尚見二鹿過一否。祖曰、汝是何人。曰、猟者。祖曰、汝一レ射否。曰、一レ射。

見説　～といわれている。うわさや評判を話題にするときにいう。古くは「説くならく」と読まれた。〔睦州録〕師問レ僧、

什麼処来。僧云、天台来。師云、――石橋作二両段一、是否。

見道　～といわれる。ほとんどの場合「不見道」（～というではないか）の形で現われ、下に必ず成語が引かれる。〔祖堂集十二禾山章〕不レ―レ殺父害レ母、出レ仏身レ血、破二和合僧一。〔伝灯録十六雪峯義存章〕不レ―レ―二遠問近対一。

兼　軽い接続詞。俗語。～と、そして。兼ねる、兼ねての意ではない。〔寒山詩〕碧嶂前―後、白雲西復東。〔祖堂集七夾山章〕某甲和尚無二仏法一、―不レ在二夾山一。

兼是　二字で「そして」、「その上」という意を表わす接続詞。〔祖堂集四薬山章〕老人曰、法公何用レ忙、這裏有二肉身菩薩一出世、――羅漢僧造二院主一。何妨二上レ山礼拝一。

こ

个　箇の略字。

箇　①数詞の後に附加して量詞として用いる。〔祖堂集十長生章〕問、如何是主中主。云、昨日送二一一一去、今日迎二一一一来。②冠詞的に用いて、ひとつの、～というもの。〔趙州録下〕老老大大、何不レ覓二一住処一。〔同〕欲レ会二一生死一、顕人説レ夢レ春。〔祖堂集八雲居章〕尒千郷万里行脚来、為二一什摩事一。③意味のない接尾語。「若箇」「此箇」「這箇」「是箇」「非箇」「妙箇」「真箇」「分明箇」「好箇」「早箇」など。

箇箇　ひとりひとり、ひとつひとつ、どれもこれも。〔祖堂集十二禾山章〕夫教道太不二容易一、――須下解二主宰一始得上。〔寒山詩〕我見二世間人一、堂堂好儀相、――惜二妻児一、爺娘不二供養一。

箇中　「ここ」という意。「箇の中」という意味ではない。「此中」「箇裏」「這裏」に同じ。〔伝灯録十六南嶽玄泰章〕今年六十五、四大将離レ主、其道自玄玄、――無二仏祖一。

箇裏　ここ。「箇中」「此中」「這裏」に同じ。〔碧嶽録二七本則評唱〕若向二――一薦得、始見二雲門為人処一。

挙　挙す。古則を拈起する時の第一声。〔雲門広録上〕時有僧問、如何是一句。師云、―。

挙似　話柄を提示すること。「挙向」というのも同じ、「似」も「向」も元来は動作の向けられる方向を示す前置詞であるが、次第に「挙」と結びついて熟語化し動詞となった。〔臨済録勘弁七〕後有レ僧―二―南泉一。〔伝灯録六馬祖章〕鄧隠峰纔到二石頭一…問是何宗旨。石頭云、蒼天蒼天。隠峰無語。却廻、―二―於師一。（本来はこの「於」は不要）〔鶴林玉露六朱文公論詞条〕公嘗―二―所作絶句一示二学者一。

向　①文語の「於」に同じ。〔伝灯録八南泉章〕一日師示衆云、道箇如如一、早是変也。今時師僧須下―二異類中一行上。②方位を示す語のうえに無意味の接頭語として添えられる。「向上」（うえ）「向下」（した）「向前」（まえ）「向後」（あと）「向北」（きた）「向南」（みなみ）③一字の動詞のあとについて一定の方向を表わす。「抛向」「披向」

向来　さっきからの、これまでの。〔伝心法要十〕――如許多言説、皆是抵敵語、都未曽有二実法指示於人一。〔祖堂集五華亭章〕――所レ議、於二我三人一、甚適二本志一。

好　～しがちである。〔寒山詩〕聡明―短命、癡騃却長年。②～するのにもってこいだ。よしひとつ～してやろう。〔祖堂集十鏡清章〕者个子―喫二一頓棒一、且放過。〔碧巌録四本則著語〕―与三十棒一。③句末について勧奨の語気を添える。〔祖堂集十二荷玉章〕師云、惜コ取眉毛一―。

好箇　好い、立派な、せっかくの。「箇」は形容詞・動詞の後につく、意味のない接尾語。〔趙州録下〕師問レ僧、従二什麼処一来。云、南方来。師云、共二什麼人一為レ伴。云、水牯牛。師云、――師僧、因二什麼一与二畜生一為レ伴。云、不レ異故。師云、――畜生。云、争肯。師云、不レ肯且従、還二我伴一来。

好生　ちゃんと、しっかりと、きちんと、立派に、の意の俗語。宋・元時代では「非常に」の意。「生」は副詞語尾。〔睦州録〕――著、莫レ教レ錯。〔伝灯録二三延慶章〕問、如何是鳳山境。師曰、――看取。

好不　「好」は否定の意味を強める語。〔碧巌録一本則評唱〕――唧嚼。〔同頌著語〕――二大丈夫一。

更　「更不」「更無」「更莫」などと否定詞と共に用いられ、その意味を強める。決して、まったく。〔伝灯録十一王敬初章〕視レ事次、米和尚至。王公乃挙レ筆。米曰、還判コ得虚空一否。公擲レ筆入レ庁、―不二復出一。〔同八亮座主章〕亮帰寺告二聴衆一云、某甲所レ講経論、謂無二人及得一。今日被二馬大師一問一、平生功夫冰釈而已。乃隠二西山一、―無二消息一。〔寒山詩〕卜択幽居地、天台―莫レ言。

更兼　二字で、そのうえ・さらに、の意。〔龐居士語録〕不二惟患レ痴、――患聾。

更是　下に来る疑問や否定の語気を強める。いったい。なおさら。〔祖堂集十三山谷行崇章〕師初開堂時、僧問、不レ責二非次一、乞師全示。云、若教二全示一、――阿誰。〔趙州録中〕問、学人近入二叢林一不レ会、乞師指示。師云、未入二叢林一、――不レ会。

恰好　ちょうど～するによい、もってこいだ。〔祖堂集十一保福章〕有レ僧問、十二時中如何拠験。師云、――二拠験一。

恰似　そっくりそのまま、まるで～みたい。〔臨済録上堂六〕若与麼来、――二失卻一。

恰如　まるで～そっくり。「恰似」に同じ。〔祖堂集四丹霞章驪竜珠吟〕転求転覓転元無、――二渇鹿趁二陽燄一。

幸自　さいわいに。「自」は意味のない接尾語。〔祖堂集三慧忠国師章〕――何怜生、要二須得二个護身符子一作二什摩一。

合殺　もともと「畢竟」「結局」「とどのつまり」といった意の副詞であるが、禅録では動詞としても用いる。〔宛陵録十六〕如今若心裏紛紛不レ定、任你学到二三乗四果十地諸位一、――祇向二凡聖中一坐。〔伝灯録十八翠巌章〕問、僧繇為二什麼一写二誌公真一不レ得。師曰、作麼生――。

忽　ふと、ひょいと、たまたま。以上は文語。仮定を表わす口語の場合には「もし」の意。〔伝灯録九福州大安章〕有レ僧問云、黄巣軍来、和尚向二什麼処一廻避。師云、五蘊山中。僧云、――被二他捉著一時如何。師云、悩二乱将軍一。

忽若　従来「忽せに若し」と読むのは誤り。この二字で仮定を

表わす副詞であり、「かりそめにも」「万一にも」の意。簡単に「もしも」と読めばよい（入矢義高『伝心法要・宛陵録』一四六頁）。→「忽」「忽然」〔投子録〕師示レ衆云、人人総道二投子実頭一。――下レ山、三歩外有レ人問二你投子実頭底事一、你作麼生向レ他道。

忽然　はたと、ふと、ひょいと（以上は文語）。もし（これは口語）。〔祖堂集七雪峯章〕有レ僧辞レ師。問、什麼処去。僧曰、浙中礼二拜径山一去。〔師問〕――径山問レ汝、向他道二什摩一。対云、待レ問則道。師打レ之。

渾　すべて。〔伝心法要八〕如是則一成二断絶一、不レ可二是無一也。

渾不　ぜんぜん～ない。→「都不」〔祖堂集十四大珠章〕師呵云、講レ経二十余座一、――レ識二如来一。

さ

乍可（むしろ～べくも）「寧可」の意。たとい～しても、～よりはむしろ。〔祖堂集十鏡清章〕白雲――レ来二青嶂一、明月那堪レ下二碧天一。

些子　少し、ちょっと。〔祖堂集三慧忠章〕帝曰、朕身一国天子、師何得二殊無一――視レ朕。〔同十一斉雲章〕師有レ時上堂、驀地起来、伸レ手云、乞二取――一、乞二取妙子一。

縷～（わずかに～するや）　～するや否や、～したとたん。「才」とも書く。古くは「裁」「財」とも書いた。〔祖堂集十四馬祖章〕座主不レ在レ意、便出一下レ堵大悟、廻来礼謝。〔臨済録上堂一〕你一開レ口、早勿交渉也。

在　①文語の「於」に同じ。また動詞について対象や場所を表わす。「著在」「執在」「坐在」②句末の「在」は唐代の俗語で、強い断定の語気を表わす。「在り」という意味はない。〔伝心法要十五〕若不レ如レ是、他日尽被二閻老子拷一レ你一。〔臨済録示衆一〕瞎屢生、索二飯銭一有レ日一。

在処　どこでもで、処処に、の意。〔祖堂集八竜牙居遁章〕師持二此問一、――不レ契二其機一。

……作什麼（……してなにをかなす）　……してどうしょうというのだ。句末の「作麼」と同じ詰問の言葉。〔祖堂集九霊巌章〕僧問、如何是学人自己本分事。師云、抛二却真金一、捨二得瓦礫一――。

作→そ

殺　①はなはだ、なかなかに、したたかに。「大殺」とか「太殺」ともいう。〔古尊宿語録九石門章〕道即一道、只得二一半一。②動詞のあとについて意味を強める。「苦殺」「笑殺」「嫌殺」「凍殺」「気急殺」

煞　はなはだ、なかなかに。「殺」と同じ。唐代では「煞」の方が一般的に用いられた。〔碧巌録八九本則〕道即一道、只道二得八成一。

し

子　接尾語として用い、「ス」と読み慣わす。「棒子」「多子」「払子」「枕子」「蚊子」など。

只管（シカン）　ひたすら、いちずに。只は祇・祇とも書く。

〔伝灯録七大梅常章〕任汝非心非仏、我――即心即仏。〔碧巌録四本則評唱〕――坐観二成敗一。

只守（ただ）　ひたすら～ばかり、ただ～だけ。「守」は意味のない接尾語。「只首」「只手」とも書く。↓「急守」「急手」〔趙州録下〕――気二急一殺人一。（ただ人をいらいらさせるだけだ。）

只如（ただ～のごときは）　たとえば～は、ところで～は。事物を話題にとり上げるときに用いる。〔祖堂集十鏡清章〕問、――二従上祖徳一、豈不二是以心伝心一。峯云、是。兼不レ立二文字語句一。師曰、――レ不レ立二文字語句一、師如何伝。峯良久。

只是　「ひたすら…ばかり、ただ…だけ」また「しかし」。祖堂集十四杉山章〕雲門聞レ挙云、南泉――歩歩登高、不レ解二空裏放下一。〔同四丹霞章〕問、和尚還在也無。対曰、在。――不レ看レ客。

只寧　「只麽」に同じ。〔伝灯録三十南岳懶瓚和尚歌〕水月無レ形、我常――。

只勿（シモ）　「只麽」に同じ。〔敦煌写本S五五三三〕莫二将喚レ看作一看中有二両種一、――看二一種一。

只没（シモ）　「只麽」に同じ。〔歴代法宝記〕有二一人一高埴阜上立。有二数人一同伴路行、遙見二高処人立一、遙相語言、此人必失二畜生一。有二一人一云、失レ伴。有二一人一云、採二風涼一。三人共諍不レ定。来至問二埴上人一、失二畜生一否。答云、不レ失。人問、失レ伴。云、亦不レ失レ伴。又問、採二風涼一否。云、亦不レ採二風涼一。既総無、縁レ何高立二埴上一。答、――立。〔祖堂集三司空山本浄章見聞覚知偈〕如二鳥空中――飛一、無レ取無レ捨無二憎愛一。

只物（シモ）　「只麽」に同じ。〔頓悟要門十二〕若了了自知レ住、在レ住時――住、亦無二住処一、亦無二無住処一也。〔王梵志詩〕生亦――生、死亦――死。

只麽（シモ）　ただ～だけ、の意。「麽」は意味のない接尾語。ひたすら、という意ではない。〔証道歌〕不可得中――得。

只摩（シモ）　「只麽」に同じ。〔祖堂集十九香厳章玄旨頌〕去去無二標的一、来来――来、有レ人相借問、不レ語笑咳咳。

此間（スカン）　ここ。古くは「此中」という。〔祖堂集七夾山章〕師問二雲蓋一、近離二什麽処一。対云、近離二朗州一。師曰、――無路、你争得レ到二這裏一。対云、既無レ路、因二什摩一有二人到二這裏一。

此箇　「此」に同じ。「箇」を見よ。〔祖堂集四丹霞章〕――真珠若採得、豈同二樵夫負一黄金一。〔同十五五洩章〕問、――門中始終事如何。

此中　単に「ここ」という意。このなか、ではない。「此間」「箇中」「這裏」などと同じ。〔陶潜飲酒詩〕――有二真意一、欲レ弁已忘レ言。〔宛陵録八〕本来無一物、何処有二塵埃一。若得二――意一、逍遙何所レ論。

死　堕落の極を形容する接頭語。「死郎当」「死忆忸」など。また逆に積極的な徹底ぶりを形容する強辞。「死工夫」「死急」「死対頭」など。

……始得（……してはじめて得ょし）　……してやっと合格。し

ばしば「須……始得」「須是……始得」「須得……始得」「直須……始得」の形で用いられる。「須是……始得」の項を見よ。〔祖堂集十鏡清章〕識二弁奴郎一——。

祇你　「是你」と同じであるが調子がややきつい。〔臨済録示衆一〕你欲二得識一祖仏一麽。——面前聴法底是。（君たちは祖仏の顔が見たいか。ほかならぬ、わしの面前で説法を聴いている君たちがそうだ）

祇如　（たとえば）例をあげるときに用いる語。「只如」とも書く。〔伝心法要十三〕——目前虚空、可レ不二是境一。

祇麽　（シモ）ただ～だけ、という意。「只没」とも書く。「只麽」を見よ。〔臨済録示衆八〕大丈夫、莫下——論レ主論レ賊、論レ是論レ非、論レ色論レ財、論説閑話過上日。

試～看　ためしに～してみなさい。丁寧な命令または勧誘を表わす。また「ひとつ～してみよう」と、本人自身の意思を表明する場合もある。〔龐居士語録〕—下レ手—。（古訓の「試みに手を下せ、看ん」は誤り。入矢義高『龐居士語録』七七頁）〔碧巌録三垂示〕請—挙—。

廝　俗語に「相」と同じに用いる。「廝見」「廝打」「廝抵」など。〔大慧書答曽侍郎第六書〕但只如レ此崖二到臘月三十日一、亦能与二閻家老子一—抵。

～次　（～のついで）～した時、～した機会に。〔臨済録勘弁四〕師一日同二普化一赴二施主家斎一—、師問、……

～自　「尚自」「猶自」「閑自」「本自」「但自」「浪自」などの「自」は、きわめて軽くついた助字。「みずから」と読んではいけない。〔寒山詩〕仏説元平等、総有二真如性一、但—審思量、不レ用二閑争競一。

自家　みずから、自分で。また「他家」（かれ）・「人家」（ひと）に対して自分自身をいう。〔趙州録上〕師上堂云、兄弟、你正在二第三冤裏一。所以道、但改二旧時行履処一、莫レ改二旧時人一、共レ你各——出家。〔雲門広録上〕都緣二是汝——無量劫来妄想濃厚一、一期聞二人説著一、便生二疑心一。

自後　それよりのち、のち。〔祖堂集十四百丈章〕——為レ僧、志慕二上乗一。

自従　（～より）～から。〔祖堂集十九霊雲章〕—コ—一見二桃花一後、直至二如今一更不レ疑。

自是　（もとより）本来、元来、もともと、の意。〔趙州録中〕問、衆盲摸レ象、各説異端、如何是真象。師云、無レ仮、——不知。〔祖堂集八雲居道膺章〕問、欲レ採二宝珠一時如何。師云、漂二入羅刹鬼国一。僧曰、大慳惜生。師云、——你無レ分。

～字　～ということ、～という言葉。たとえば「無字」とは「無ということ」「無という言葉」の意。〔投子語録〕問、仏法二一、如何弁二得清濁一。〔趙州録上〕師示衆云、仏之一一、吾不レ喜レ聞。

似　①「如」に同じ。〔祖堂集十三報慈章〕平生被二人請謚一、口—二褊檐一。②「示」と同義に用いることがある。〔伝心法要十三〕撒レ手—レ君無二一物一、徒労二謾説二数千般一。③一字の動詞の下に付けて動作の向けられる方向を示す接尾語。『助字弁略』では「向」に読み替えている。「話似」「見似」「挙似」「呈似」

「説似」など。『祖堂集』巻十三の招慶の章に「終不錯挙似於人」とあるのは例外的な用法で、「挙似」は複合語化している。

～児　名詞・形容詞につく接尾語。「雀児」「猫児」「牛児」「孩児」「奴児」「屠児」「廝児」「貧児」「癡児」「師子児」「野狐児」「工技児」「出家児」など。

児家　俗語で、わかい女の用いる第一人称。単に「児」ともいう。〔寒山詩〕――寝宿処、繡被満二銀牀一。

事須　（すべからく～べし）　事は強意の接頭語。意は「須」に同じ。「是須」とも書く。〔祖堂集十一禾山章〕不レ可二類同一、――二甄別一。

～時　～ということ。～という場合。〔雲門広録上〕問、樹凋葉落―如何。師云、体露金風。

直下　（ジキゲ）　そのまま、すばりと。〔伝心法要序〕――便是、動レ念即乖、然後為二本仏一。〔臨済録上堂一〕還有二作家戦将、――展レ陣開レ旗麽。

直須　「須」に同じ。「直」は意味を強める接頭語。〔祖堂集十六南泉章〕欲レ躰二此事一、――二向下仏未二出世一已前上、都無二一切名字一、密用潜通、無二人覚知一、与摩時躰得四。方有二小分相応一。所以道、祖仏不レ知レ有、狸如白牯却知レ有。何以如レ此。他無二許多般情量一。所以喚作二如如一、早是変也。――下向二異類中一行上。

直須……始得　……でなくてはならぬ。「須是……始得」の項を見よ。〔臨済録示衆八〕道流、你若欲二得如法一、――二是大丈夫児一――。

直鐃　（たとい）　たとい～とも。〔祖堂集五雲巌章〕従レ門入者非レ宝、――説得石点頭、亦不レ干二自己事一。

直是　①まさに。〔祖堂集六投子章〕――省要。②たとい。〔祖堂集十三報慈章〕――道得十成、亦須二痛決過一。

直得　「～という結果にまでなった」ということを強く提示する。ただし屈折の気持があれば「たとえ～であっても」という意味になる。〔祖堂集十五東寺章〕――レ無二言可レ対（なんともこたえようがありませんでした）。〔同十四馬祖章〕今日之下、被二馬大大師呵嘖一、――二情尽一。〔同十一保福章〕有人便問、承師有レ言、是你諸人著レ力、須二得趁著一始得。若不二趁著一、喪身失命。――二趁著一、還不二喪身失命一也無（たとえ追いつけても命を失うのではないですか）。

且　（しばらく）　語気を少しゆるめる副詞。まあ、ともかく、とりあえず。〔臨済録行録十二〕―坐喫レ茶。

且喜　お見事な～だ。「同慶の至りだ」という言い方で逆に相手を抑下する場合が多い。〔碧巌録一本則評唱〕――没交渉。

……且従　（……はしばらくまかす）　……はともかく、……はそれとして。「且置」と似た言い方。〔祖堂集十一保福章〕古人道、這裏則易、那裏則難。這裏則――、那裏事作摩生。

且致　「且置」に同じ。〔碧巌録七垂示〕即今事――、雪竇公案、又作麽生。

且置　（しばらくおく）　～はともかくとして、さておいて。「且致」とも書く。〔趙州録上〕問、従レ上至レ今、即心是仏。不二

即心一、還許三学人商量一也無。師云、即心――、商二量箇什麼一。

且如（たとえば）～という場合。「只如」と似たいい方。〔宛陵録十四〕――瞥二起一念一便是境。

且摩　ともかく、ひとまず。〔祖堂集十一保福章〕近日老邁、――過時。

者　「這」「遮」に同じ。〔祖堂集十五帰宗章〕師云、――一隊漢、向三這裏一覓二什摩一。趁出了、呵呵大笑。（者と這の混用例）

者箇　これ、この。「這箇」「遮箇」と同じ。〔宛陵録十〕理二論――法一、豈是你於三言句上一解二得他一。

者般　「這般」に同じ。「雲門広録中」――底作二与麼去就一。

者裏　「ここ」または「そこ」の意。近い場所を示す。「那裏」に対する。「者」は這・遮・赭とも書き、「裏」は裡・里とも書く。〔伝心法要八〕我暫如レ此説、你便向二――一生レ解。〔趙州録下〕師問レ僧、伊在二那裏一焼香礼拝、我又共レ你在二――一語話。

這　この。遠称の「那」に対して近称。「這」だけでは「これ」の意にならず（「只這是」は例外）、「這箇」と言わねばならない。その点が現代の用法と異る。「那」についても同様。〔祖堂集九羅山章〕因鄭十三娘年十二、随二一師姑一、参二見西院大潙和尚一。……潙山再問、――老婆子、什麼処住。

這箇（シャコ）　これ。この。〔伝灯録十五洞山章〕又問二雲巌一、和尚百年後、忽有レ人問下還貌二得師真一不上、如何祇対。雲巌曰、但向レ伊道、只――是。「祖堂集十七岑和尚章」師指二東辺露柱一云、――師僧説得。

這底　これ、このもの。宋代には「這的」という。〔伝灯録六石鞏章〕問、如何免二得生死一。師云、用レ免作二什麼一。僧云、如何免得。師云、――不二生死一。

這般　このたぐいの、こんな。〔祖堂集十五盤山章〕我不レ可レ著二汝――底一、向後去二別処一、打二風顛一去也。〔碧巌録四本則著語〕捋二虎鬚一也須二是――人一始得。

這辺　こちら。「那辺」の対。〔祖堂集四丹霞章孤寂吟〕塵滴存乎未レ免レ偬、莫下棄二――一留中那辺上。

這裏　「者裏」に同じで、ここ、そこ、という意の近い場所を指し示す語。〔伝灯録十趙州章〕僧問、澄澄絶レ点時如何。師云、――不レ著二客作漢一。

遮　「這」に同じ。〔大慧書答曾侍郎〕如上――一絡索、只在二当人末後一念真実一而已。

遮些　「這些」とも書く。これらの。「些」は複数を表わす語尾。〔大慧書答呂郎中〕被二――言語使得一来、七顛八倒。

遮莫（さもあらばあれ）　六朝以来の俗語。たとえ～であろうとも。下の句でそれを承けて転折するのが普通の句法。まれにその順序が逆になることがある。〔捜神記十八〕――千試万慮、其能為レ患乎。〔祖堂集四丹霞章〕二時龕糖随縁過、一身――布毛裘。

灼然　～ということは明々白々だ。「灼然たり云云」と読むのがしきたり。〔睦州録〕師云、――賊来須レ打、客来須レ看。

酌然　「灼然」の書き誤り。〔聯灯会要二十洞山良价章〕――言不レ干レ典、非二君子之所下談。

若為（いかん）　どのように。〔祖堂集三慧忠国師章〕汝――得レ見レ我、及聞二我説法一乎。〔同十二荷玉章〕古人恐二与レ虵画レ足、眼中生翳、復――（さてどうだ）。

若教（もし）　二字で「もしも」の意。〔祖堂集十三報慈章〕――更進一歩、也是無端。

若子（かくのごとく）　このように。「偌子」とも画く。〔祖堂集十七西院大安章〕両脚――大、担二得二碩一。

若是（もし）　二字で「もし」の意。〔伝心法要十三〕――無レ物、更何用レ照。

若也（もし）　二字で「もし」という意。従来「もしまた」と読むのは誤り。〔伝心法要十三〕――渉レ因、常須レ仮レ物、有二什麼了時一。〔碧巌録四本則評唱〕――不レ見、切忌妄生二情解一。

～取　接尾語。「道取」「看取」「聴取」「識取」「記取」などと用いられ、動作を意図的かつ積極的に行うという気分を示す。

取次　いいかげんに、場あたりに、おいそれと。「造次」とほぼ同じ意味に用いられる。〔投子語録〕今後不レ得二――過レ日。

須　きっと、かならず。当為を表す用法とは別。〔祖堂集四薬山章〕師看経次、僧問、和尚尋常不レ許二看経一、為二什摩一却自看経。師曰、我要レ遮レ眼。進曰、学人学二和尚一看経、得不。師曰、汝若学レ我看経、牛皮也――穿過一（牛皮さえうがつことになるだろう）。

須……始得（すべからく……してはじめてよし）　ねばならない、……でなければならない。「須是……始得」を見よ。〔祖堂集十九霊雲章〕――与摩一――。（そうでなくてはならない。）

須是……始得（すべからく……してはじめてよし）「須是……始得」という照応句法は唐代いらい常用の言い方であって、後世までも用いられる。文字どおりには「すべからく……でなくてはならぬ、〔そうであってこそ〕始めて得い」という意。「始得」をはぶいても差支えない。「須らく……始めて得べし」という旧訓は誤りである。（入矢義高『龐居士語録』一六七頁）「須……始得」「須得……始得」「直須……始得」も同じ句法。〔龐居士語録〕――二恁麼一――。

須得　「須」に同じ。～ねばならぬ。「得」は語助。〔祖堂集七夾山章〕欲レ行二鳥道一、――二足下無レ絲。〔同八疎山章〕欲レ臨二説法一時、――二口裏吐二出不浄一。

須得……始得　ぜひとも……しなくてはならぬ。「須是……始得」の項参照。〔祖堂集十一保福章〕是你諸人著レ力、――趁著一――。

須要　～する必要がある、～しなくてはならない。〔伝心法要十五〕為二你不二是与麼人一、――下――向二古人建化門一広学中知解上。

什麼（なに）　①「何」に同じ。「什摩」とも書く。〔伝灯録五南岳章〕祖曰、――物恁麼来。〔同〕大徳、坐禅図二――一。②なんという。なんとりっぱな。なんとくだらぬ。〔祖堂集四石頭章〕千聖是――垸鳴声。〔同十九臨済章〕無位真人是――不浄之物。〔玄沙広録中〕以レ手打二法堂柱一云、也是――好法堂、――好柱。

溜地　「与麼」に同じ。「溜」は「熠」とも書かれる。〔宗門統要続集五〕南泉云、他――驢年去。

溜麽（没）「与麽」に同じ。〔雪峯語録上〕一等是――時節。〔同〕和尚――道即得。〔雲門広録下〕某甲也――。

終帰（ついに）結局、つまりは。〔祖堂集七夾山章〕看レ君只是撑船漢、――不二是弄潮人一。〔同十四章敬章〕風力所レ転、――敗壊。

終自（ついに）ついに。「自」は意味のない接尾語。〔祖堂集三慧忠国師章〕看二他人食一、――不レ飽。

終須「終」は強意の接頭語。意味は「須」に同じ。〔祖堂集十二禾山章〕未レ有レ跨二日程一、――帯二影跡一。

終不　断じて～しない。「終」は強意の接頭語。〔祖堂集四石頭章〕寧可二永劫沈淪一、――レ求二諸聖出離一。

～住　動詞のあとについて動作の固定を表わす。「～不住」はその不可能なことを表わす。「住」は「駐」とも書く。「把住」「約住」「搦住」など。

従他　「他の～するに従す」「従い他～すとも」。また句の頭に用いられた場合、二字で「たとい」と読んでもよい。「任他」というのも同じ。他は三人称代名詞であるが、二人称の你を用いて、「任你」「従你」としても意味は同じ。「遮渠」ということもある。〔祖堂集十四馬祖章〕三十年来作二餓鬼一、如今始得レ復二人身一、青山自有二孤雲伴一、童子――二事二別人一。〔碧巌録二八本則著語〕――錯一平生、不レ合二与レ他恁麽道一。（「たとい一平生を錯るとも、……」。従来この「従他」を「さもあらばあれ」と読むのは誤り）

従頭　はじめから、かたっぱしから。〔伝灯録三十懶瓚和尚歌〕挙レ頭見二日高一、乞レ飯――拝。〔祖堂集十三報慈光雲章〕四方来者、――勘過、勿二去処一底、竹片痛決、直是道得十成、亦須二痛決過一。

縦使（たとい）もし～だとしても、かりに～しても。「縦令」「仮令」「仮使」ともいう。〔伝心法要三〕――三祇精進修行、歴二諸地位一、及二一念証時一、祇証二元来自仏一、向上更不レ添二得一物一。

縦饒（たとい）〔祖堂集十八仰山章〕若未レ得二其本一、――将レ情学レ他亦不レ得。

縦然（たとい）〔伝心法要十三〕如二人以レ鏡照レ面、――得レ見二眉目分明一、元来祇是影像。

縦令（たとい）〔祖堂集十四百丈章〕若不二能任摩得一、――誦二得十二囲陁経一、只成二増上慢一。

所以（ゆえに）故に、だから。「為」の字が前に在る場合と、そうでない場合とがある。文語の「所以」とは異なる。〔伝心法要十〕此道天真、本無二名字一、祇為二世人不レ識、迷在二情中一、――諸仏出来、説二破此事一。〔臨済録示衆八〕境即万般差別、人即不レ別、――応レ物現レ形、如二水中月一。

所有　あらゆる。また、あらゆるもの。〔宛陵録五〕凡――レ相、皆是虚妄。〔同〕除二去――一、唯置二一牀一、寝レ疾而臥。

如～ニヨ

汝儂　なんじ、君。〔祖堂集十一睡竜章〕我今斉挙唱、方便示二――一。

除却　～をのぞいて。〔祖堂集十八仰山章〕――二――這个色一、還更

有レ色也無。

除非　まさに、ただ、の意。後世では「除是」や「只除是」という言い方に変わる。〔祖堂集十三招慶道匡章〕――ニ――師子、請和尚道二一句。〔伝灯録十二雙峯古章〕――ニ――知レ有、莫二能知ㇾ之。

除非是　「除非」に同じ。まさに、ただ。〔碧巌録七本則評唱〕若要レ見二他全機一、――――一棒打不レ回レ頭底漢、牙如二劒樹一、口似二血盆一、向二言外一知帰、方有二少分相応一。

尚自　「尚」に同じ。「自」は意味のない接尾語。→「猶自」「祖堂集五雲巌章〕吾説法――不レ聞、豈況於二無情説法一乎。

尚乃　～してさえなお。〔祖堂集十九陳莆鞋章〕明明向レ你道、――不レ知、豈況蓋覆将来。

将　①～を。目的語の上に付ける。後世では「把」を用いる。〔祖堂集四丹霞章〕――レ飯与二闍梨一喫底人、還有レ眼也無（飯をあなたに喰べさせた人に眼はあったか）。②～で。「用」ともいう。〔同上十九臨済章〕既因レ他得レ悟、何以却――レ拳打レ他（彼のおかげで悟りを得たのに、どうして拳骨で彼をなぐったのか）。③語調を緩める軽い接頭語。「将恐（～ではないかと思う）」「将知（知る）」「将養（やしなう）」など。

将為　「将謂」に同じ。〔祖堂集七夾山章〕――禅宗与レ教不レ殊、天然有二奇特之事一。

将謂　六朝以来の俗語。いつも「思い違いする」「誤解する」という意味。「将為」とも書く（入矢義高『伝心法要・宛陵録』二四頁）。「～とばかり思っていた」。また「～とばかり思っていたら、実はそうでないことが分った」という意の句が下に続くことが多い。〔伝心法要三〕世人聞二道諸仏皆伝二心法一、――心上別有二一法可レ証可レ取、遂将レ心覓レ法、不レ知二心即是法、法即是心一。〔祖堂集十五汾州無業章〕師言下豁然大悟、涕涙悲泣、白二馬大師一言、本――仏道長遠。今日始知二法身実相本自具足一。

～将去（～しもちさる）「～将来」を見よ。〔祖堂集十二清平惟儼章〕問、如何是第一句。師去、要レ頭則斫――。

将作　～と見なす、～と認める。〔祖堂集八曹山章〕躰在二妙処一、莫――等閑一。

将是　～と思う、の意味の俗語。「将作」ともいう。〔歴代法宝記下〕見二此禅師一、与二金和上一、容貌一種。逖等初見、――ニ――金和上化身一。

将当　～と見なす、思い込む。〔伝灯録十四三平義忠章〕示衆曰、今時出来、尽学二馳求走作一、――ニ――自己眼目一、有二什麽相当一。

～将来（～しもちきたる）　将は動詞のあとにつき、そえ字となり、動作の現実化を表わす俗語的用法。寄将・移将・携将・取将・盛将・索将など。「鈿合金釵寄将去」（長恨歌）のごとく、将のあとに去・来がつく場合もある（小川環樹『唐詩概説』二一四頁）。〔伝灯録二一僊宗守玭章〕僧問、請師答二無賓主話一。師曰、向二無賓主処一問――。

餉時　すぐに。「一餉時」ともいう。〔祖堂集十三福先招慶章〕又上堂、示衆了、――却言……。

上頭　うえ。「～頭」を見よ。〔歴代法宝記〕時印宗問二衆人一、汝総見風吹二幡干一――一翻動否。〔雲開広録中〕者箇是屋、――是天、手裏是拄杖。

上来　今まで。「従上来」に同じ。〔祖堂集十長慶章〕――何在。

～成　「十成」（十割り、百パーセント）、「八九成」（九分どおり）などと数詞に付けて用いる。また動詞の下に付けて、その動作が成就したことを示す。「打成」「修成」「説成」など。

情知　（あきらかにしる）頭だけでわかったというのではなく、身全体ではっきりとわかること。『助字弁略』に「情知猶レ云二明知一也」という。〔龐居士語録〕居士一日問二百霊一曰、是箇眼目、免二得人口一麽。霊曰、作麽免得。士曰、――、――。

参差　（シンシ）ほとんど。俗語であって、文語の用法とは別。〔趙州録上〕問、如何是正修行路。師云、解二修行一即得。若不レ解二修行一、即――落二他因果裏一。

真誠　まことに。普通は「真成」と書く。庾信の「鏡賦」に「真成箇鏡特相宜」。また「真箇」ともいう。〔聯灯会要二二雲居膺章〕八十翁翁入二場屋一、――不二是小児戯一、一言若差、郷関万里。

任汝　「任你」に同じ。「従他」を見よ。「伝灯録七大梅法常章」――非心非仏、我只管即心即仏。

任你　この二字で「たとい……とも」と訓じてもよい。「従你」ともいう。你は二人称代名詞であるが、三人称の「他」を用いて「任他」「従他」といっても、意味の上では同じ。（入矢義高『寒山』一三一頁）〔寒山詩〕――千聖現、我有二天真仏一。〔祖堂集十五大梅法常章〕師云、――非心非仏、我只管即心即仏。

任摩　そのように、このように。そのような、このような。「与麽」に同じ。恁摩・恁麽とも書く。〔祖堂集十六潙山章〕你若――、因レ何更就レ我覓。〔同十五龐居士章〕居士云、豈有二――事一。

怎生　「作麽生」に同じ。〔碧巌録二頌評唱〕畢竟――得二平穏一去。

甚　「什麽」に同じ。「什」ともいう。①「何」の意。〔伝心法要十五〕且与二你本体一有二――交渉一。②なんという、なんとりっぱな、なんとくだらぬ。〔碧巌録一本則著語〕是―繋驢橛。

甚処　どこ。〔雲門広録中〕師或拈二拄杖一、示レ衆云、拄杖子化為レ竜、呑二却乾坤一了也。山河大地、――得来。

甚生　なかなかの、大した。〔伝心法要十六〕――阿難三十年為二侍者一、祇為二多聞智慧一被二仏訶一。〔玄沙広録上〕――桑梓之能。

甚摩　「什麽」「甚麽」に同じ。〔祖堂集十三報慈章〕皇帝又問、還見不。師云、是――。〔同〕和尚対二聖人一説二个――事一。〔同〕既然如レ此、為二――挙二一念想一、得レ見二普賢一。

尋後　ついで、のち。〔祖堂集十鏡清章〕――有レ僧挙似化度一。

尋常　ふだん、日ごろ。〔伝灯録七魯祖宝雲章〕師――見二僧来一便面壁。〔雲門広録上〕問、如何是――之用。師云、且那裏葛藤去。

尋即　すぐに、ただちに。〔曹渓大師別伝〕又大師滅後、法衣

両度被二人偸捋一、不レ経二少時一、――送来、盗者去不レ得。

尋則　すぐに、「尋即」に同じ。〔祖堂集二僧伽難提章〕至二樹下一立而挙二左手一、攀二其樹枝一、――滅度。

尋便　すぐに。〔祖堂集十鼓山章〕師乃豁然而已、――手揺拽。

儘　飽くまでも、とことん。思いきり。また、どれほど～しようとも、という意の用法もある。唐代以前はこの字はまだ用いられることなく、「尽」を上声に読むことで代用した。宋代に現われる「儘教」は「たとい～とも」の意。〔虚堂録五〕象王象子―相随。

す

遂則　「遂」に同じ。「遂即」ともいう。〔祖堂集一釈迦牟尼仏章〕後諸大臣知二是王仙太子一、――重冊灌頂。

遂輒　「遂」に同じ。そこで。〔祖堂集四丹霞章〕爰有二禅徳一、遠来問津。山下遇見レ師、――申レ問。

遂乃　そこで。〔祖堂集八竜牙章〕後聞下洞山言玄二格外一、語峻二時機一、――策節而造二其席一。

雖云（いえども）「雖」に同じ。「云」は意味のない語助。〔祖堂集五華亭章〕―三―法眼無二瑕翳一、争奈其人掩レ耳聴。

雖然（いえども）「雖」に同じ。「然」は意味のない語助。〔祖堂集十七岑和尚章〕百尺竿頭不動人、―二―得レ入未レ為レ真、百尺竿頭須レ進レ歩、十方世界是全身。

雖則（いえども）「雖」に同じ。「則」は「即」とも書き、意味のない語助。〔祖堂集七巌頭章〕―二―徳山同レ根生二、不下与二雪峯一同レ枝死上。

随後　すぐにおっかぶせて、間をおかずに、という意味の俗語。（入矢義高『龐居士語録』二四頁）〔龐居士語録〕士喝便出。峰――亦喝。〔碧巌録二頌評唱〕便――道。

せ

是～　①主格に立つ体言に冠し、その体言を強く規定して提起する。「是你（ほかならぬお前、お前こそ）」「是他」「是渠」「是誰」「是汝」「是這箇」「是什麽」など。②主格に立つ体言に冠してその体言を普遍的に提示する。「是人（あらゆる人、人というもの）」「是処（あらゆる処、どこでも）」など。唐詩に例が多い。

是伊　伊（かれ）を強く提示した言い方。「是～」を見よ。〔祖堂集八雲居章〕問、大業底人、為二什摩一閻羅天子覓不レ得。師云、――解レ蔵レ身。

是我　「是～」を見よ。〔祖堂集十長慶章〕――這裏別有二来由一。（ほかでもないわしのここにはまた別の流儀がある。）

是渠　「是～」を見よ。〔祖堂集八曹山章〕如二大家人守銭奴一相似、及レ至二用時一、――惣不レ得レ知二東西一。

是汝　「是～」を見よ。〔祖堂集十四馬祖章〕――自身尚乃未レ得二恬静一、何能令二他道業成持一。

是誰　「是～」を見よ。〔龐居士語録〕阿師得力句、――得レ知。（和尚がおかげを蒙られた言葉は、さて誰が知っていましょうか。入矢義高『龐居士語録』六九頁）

是你　「是〜」を見よ。〔祖堂集十八趙州章〕師云、――与レ我買二餬餅一（オマエがわしに胡餅をおごるのだよ）。児子云、不レ得、和尚（そりゃないですよ、和尚さん）。〔臨済録示衆十〕――欠少什麼（いったいお前たちはなにを缺いているのだ）。

……是不（ぜなりや）　そうか、ほんとうか。〔祖堂集十六潙山章〕師問二雲岳一、承你久在二薬山一――。対云、是。

是勿　「什麼」に同じ。〔神会録一〕問、――是生滅法。答、三世是生滅法。

是没　「什麼」に同じ。〔大乗無生方便二〕――言レ浄。〔同十八〕妙法蓮華経、――是妙法。

是物　「什麼」に同じ。〔神会録（胡適本）〕問、喚作二――一。答、不三喚作二――一。

〜生　意味のない接尾語。「多知生」「可憐生」「大深遠生」「大無礼生」など。

成→じょう

適来（せきらい）　さきほど、いましがた、たったいま、という意の副詞。〔臨済録勘弁十一〕――是汝喝二老僧一。〔洞山録〕老僧――暫時不在。

切須　「須」に同じ。「切」は強めの語。「大須」「事須」などと同じ言い方。〔祖堂集十九臨済章〕大徳、山僧略為二諸人一、大約話二破綱宗一。――二自看一。

設使　たとい……とも。〔祖堂集五雲巌章〕――会得、也只是左レ之右レ之。

設而　たとい……とも。〔祖堂集十一保福章〕――道得十成、猶是患レ謇。

設尓　たとい……とも。〔祖堂集十鏡清章〕――不二与摩一、傷二著他牽匱一。

説　言う。「説く」ではない。〔臨済録勘弁四〕普化云、這裏是什麼所在、――レ麁――レ細。

専甲　得体の知れない語であるが、禅録ではしばしば「某甲」と同じく第一人称の代名詞に用いられる。あるいは「某甲」の転訛かとも考えられる。〔祖堂集十八仰山章〕――仏亦不レ見。

然雖（……といえども）　「雖」に同じ。「雖然」というのも同じ。〔祖堂集五華亭章〕若然者、不レ用レ入レ山、各自分去。――如レ此、有レ事嘱二於師弟一。

そ

作没（ソモ）　「作麼」「作摩」に同じ。〔神会壇語〕今推二到無住処一立レ知――。

作麼　「作摩」に同じ。

作摩（ソモ）　句頭に来る場合には常に反語。どうしてそんなことがあろうか、そんなはずはない、の意。また句末に来る場合には非常に強い詰問の語気を示す。吐き捨てるような口調になることも多い。どうしょうというのだ、つまらんことはするな、といったほどの意。古くは「作没」と書く。〔祖堂集十一斎雲霊照章〕師云、仏病最難レ治。進曰、師還治也無。師云、――不レ得。〔同十三招慶道匡章〕問、古仏道場、

如何得レ到。師云、更擬二什摩処去一。学云、与摩則学人退二一歩一。師云、又是乱走――。

作勿生（ソモサン）「作摩生」に同じ。〔神会語録（胡適本）〕――是。

作没生（ソモサン）「作摩生」に同じ。〔大乗無生方便三三〕諸竜鬼神等――住。答、依レ海住。

作物生（ソモサン）「作摩生」に同じ。〔神会語録八〕異没時――。

作麽生（ソモサン）「作摩生」に同じ。

作摩生（ソモサン）「如何」に同じ。「作麽生」「作勿生」「作没生」「作物生」とも表記する。〔祖堂集六神山章〕――是大地一斉火発（どのようなのが大地が一斉に火を吹くということでしょうか）。〔同四丹霞章〕――語話、即得レ不レ堕二門風一（どのように語話すれば、家名をおとさないですみましょうか）。〔同薬山章〕古人石上裁レ花、意――（古人は石上に花を植えましたが、そのこころはどうでしょう）。

早　すでに。俗語的用法。「早是」ともいう。〔趙州録下〕師示レ衆云、未レ有二世界一、一有二此性一。世界壊時、此性不レ壊。

早已　すでに。〔祖堂集十五麻谷章〕此事眨二上眉毛一、――差過也。

早箇　すでに。「～箇」を見よ。〔祖堂集十六潙山章〕徳山行脚時到二潙山一、具二三衣一、上二法堂前一、東覷西覷了便発去。侍者報二和尚一云、適来新到不レ参二和尚一便発去。師云、我――相見了也。

早是　すでに。〔伝灯録八南泉章〕一日師示レ衆云、道二箇如如一、――変也。今時師僧須下向二異類中一行上。

早晩　時間について問う、俗語の疑問詞。いつ、どの時。また、単に「どうして」という反問の語気を表わすだけの例も唐代にはある。〔伝心法要八〕虚空――向レ你道二有レ同有レ異。〔趙州録中〕云、叉手向二人前一争奈何。師云、――見二你叉手一。（反語）

争解　～できるはずがない。〔祖堂集六神山章〕若無二気力一、――与摩道得一。

争似（いかでかしかん）（直前に述べたことを受けて）それよりも～するに越したことはない。～には及ばない。〔証道歌〕勢力尽、箭還墜、招二得来生不如意一、――無為実相門、一超直二入如来地一。〔祖堂集九九峯章〕師云、鹿中雖レ有二隠レ形術一、――全身入二帝郷一。

争得　どうして～しえようか、～できるはずがない。〔祖堂集七夾山章〕師曰、此間無レ路、你――レ到二這裏一。

争那（いかんせん）「争奈」に同じ。どうしようもない、どうしようか。ふつう「争那…何」の形をとる。〔祖堂集四天皇章〕僧云、――学人疑滞一何。

争奈（いかんせん）どうしようもない、どうしようか。「争奈…何」の形がふつう。〔祖堂集三華亭章〕――其人掩レ耳聴。〔同九落浦章〕任你截二断天下人舌頭一、――無舌人解レ語何。

…相似　…にそっくり、…のよう。〔祖堂集十八御山章〕師叔用使、直下是大虫――。

総須　「須」に同じ。「総」は強意の接頭語。〔祖堂集十四大珠章〕若不二安禅静慮一、到者裏――二忙然一。

総須…始得　…しなければならない。「須是…始得」を見よ。〔祖堂集十四百丈政章〕个个――レ償レ他――。

造次　おいそれと、安直に。「取次」ともいう。〔投子語録〕問、如何是和尚師。師云、莫二――一。〔碧巌録八頌評唱〕古人吐二一言半句一出来、不二是――一。

即　①～そのものが、ほかならぬ～こそが。次に来る名詞を立言の主題として強く規定し正面に押し出す。〔祖堂集十五汾州無業章〕常聞二禅門一―心是仏一、実未レ能レ了、伏願指示。馬大師曰、―汝所レ不レ了心即是、更無二別物一。②～である、～にほかならぬ。二者を無媒介・無条件に等置する。同じ繋辞でも「是」や「為」より強い表現。〔伝灯録二八江西道一語〕諸法―解脱、解脱者―真如。③「則」と混用する。

即今　いま。〔臨済録示衆六〕你若欲二得生死去住脱著自由一、――識二取聴法底人一。

即是　①繋辞　～である。～にほかならない。〔祖堂集十四馬祖章〕汝今各信二自心是仏、此心――仏心一。②「則可」の意。〔伝灯録五南嶽懐譲章〕如二牛駕レ車、車不レ行、打レ車――、打レ牛――。（車を打ったらよいか、牛を打ったらよいか）。③「即此」の意。〔祖堂集六洞山章〕師曰、阿那个是闍梨主人公。対曰、現祇二対和尚一――（現に和尚さんにお答えしているのがそうです）。

…即得（…はすなわちえたり）　…したらよろしい、…するのはかまわない。〔祖堂集三慧忠国師章〕師曰、適来意作摩生。対曰、向二阿誰一説――。〔同十五五洩章〕大師云、与レ你剃レ頭――、若是大事因縁―不レ―。

則今　「即今」との混用。

…則得（…はすなわちえたり）　…はよろしい。〔祖堂集八疎山章〕師云、是闍梨与摩道――。若約二病僧一則不レ然。（あなたがそうおっしゃるのはけっこうです。しかし私の立場からすればいけません）

触事　ことごとに、何ごとにつけても。〔菩提達摩四行論二四〕若能不レ拒二逆変化一者、――不レ悔。〔祖堂集十三報慈光雲章〕見若不レ見、――何妨。

触処　いたるところで、どこででも。随処、是処と同じ。〔曹山録〕若不二変易一、直須二――自由始得一。

触所　「触処」に同じ。どこに行っても、いたるところ。〔龐居士語録序〕唐貞元中、禅律大行、祖教相盛、分レ輝引レ蔓、――皆入。

触途　どこえ出かけても、どの道をとっても。「触途成滞」のように用いる。〔寒山詩〕昔時可可貧、今朝最貧凍、作レ事不二諧和一、――成二倥偬一。

触物　どんなものでも、何ものに行きあたっても。〔菩提達摩四行論二四〕若不レ逆二幻化一者、――無レ碍。

触目　目にふれるものすべて。〔祖堂集二慧能章〕今日始知、涅槃不レ遠、――菩提。〔同九落浦章〕今時学人、――有レ滞、蓋為下依二他数量一作上解。

た

他　①口語の三人称代名詞。かれ、それ。なお、英語の冠詞のように名詞の上に軽く添える用法もある。〔伝心法要八〕未審接上根人、復説何法。師云、若是上根人、何処更就人覓一。〔祖堂集六石霜章〕老僧不曾得一顔色、教我作摩生。②意味のない語助。「任他」「従他」（たとい…とも）「管他」（…に管せんや）「知他」（…を知らんや）のほか「妨他」「欠他」「添他」などのように一字の動詞に軽く添えるだけの用法がある。

他家　ひと、他人。また、かれ、かれら。〔祖堂集九落浦章神剣歌〕――不レ用我家剣。

他个　かれ、かれら。〔祖堂集十八陸亘大夫章〕泉云、大夫道、――欠少什摩。

他後　いずれのち、いつか。〔祖堂集十九臨済章〕叮嘱云、――或逢霊利者、指一人来相訪。

他誰　たれ。「他」は接頭語で意味をもたない。〔祖堂集六洞山章〕師曰、某甲看レ他則有レ分、――彩某甲。

多少　数を尋ねるときに用いる。どれほどの、どんな大した、の意。なお「大小（～ともあろうものが）」と誤って混用される場合もある。〔投子録〕問、文彩未生時如何。師云、虚空合レ喫――棒。〔碧巌録三頌評唱〕将謂――奇特。〔祖堂集七巌頭全豁章〕――天下潙山、泥レ壁也未レ了在。

多是（あらゆる）すべての、という意の口語。「応是」ともいう。〔伝心法要十五〕如今末法向後、――学禅道者、皆著一切声色。

打底　はじめから、とんと。〔伝灯録十九雲門章〕――不レ遇作家、至竟只是箇掠虚漢。

太…生　はなはだ…だ。「生」は語助。「太粗生」「太可憐生」「太孤危生」「太廉纖生」など。

太殺　はなはだ。「大殺」に同じ。「太煞」とも書く。〔祖堂集十四石鞏章〕――拽人鼻孔、直得脱去。

太煞　はなはだ。「煞」は殺と同じ。〔碧巌録十五頌著語〕――減人威光。

待　その時になったら、～となったら。〔伝灯録八龐蘊章〕参問馬祖云、不与方法為レ侶者是什麼人。祖云、――汝一口吸尽西江水、即向レ汝道。

大…生　「太…生」に同じ。はなはだ…だ。「生」は語助。「大高生」など。

大有　大有…といういい方は、下に来る事実の存在を強調するいい方で、必ずしもたくさん有るという意味ではない。「大」を強辞として動詞の上に置くのは、六朝以来の一般的用法である。〔祖堂集二慧能章〕道明云、行者好与、速向嶺南。在後――僧来趁行者。〔同五雲巌章〕――人不レ肯与摩道。

大家　みんな、みなさん。〔祖堂集十三報慈章〕――担レ柴則担レ柴、――擣レ米則擣レ米。

大好　道忠和尚は言う、この語には、字義どおりの意味の場合と、托上の抑下、つまりからかつてほめる場合とがある。こ

れは文に臨んで弁別しなければならない、と。〔趙州録下〕

問二新到一、従二何方一来。云、無二方面一来。師乃転レ背。僧将二坐具一随レ師転。師云、――無二方面一。

大殺　はなはだ。「大煞」とも書く。宋元では「忒煞」という。〔祖堂集四薬山章〕你――聡明。

大須　ぜひとも～せねばならない。「事須」「是須」「直須」「径須」というのも同じ。〔祖堂集十八仰山章〕到二這裏一、鉄仏亦須二汗流一。汝――二修行一。〔伝心法要十五〕――下努力、尽二今生一去上。

大小　①どれくらいの大きさか。ものの大きさを問う疑問詞。〔祖堂集十五招慶道匡章〕問、古人有レ言、閻浮有二大宝一、少見得人希。如何是大宝。師云、見摩。僧謝二師垂慈一。師云、――。②～ともあろうものが。「大小大」と強調していうこともある。〔伝灯録十六巌頭章〕――徳山猶未レ会二末後句一。

大都　すべて、みな。「都大」ともいう。〔趙州録上〕師又云、老僧九十年前、見二馬祖大師下八十余員善知識一、箇箇俱是作家、不レ似下如今知識、枝蔓上生二枝蔓一、――是去レ聖遥遠上。

第一～　「第一不得」「第一莫」「第一勿」「第一不可」などのように、禁止を表わす語の上について、禁止の意味を強める。絶対に、断じて（～してはいけない）。まれに禁止でなく「～せよ」と強く命ずる用法があるが、極めて例外的である。〔伝灯録五司空山本浄章〕忽逢二修道人一、――莫二向道一。〔伝心法要十一〕――不レ得下作二知解一、祇是説中汝如今情量処上。〔雲門広録中〕――須レ忌レ火。

脱体　身ごと、身ぐるみ。〔寒山詩〕奈何当奈何、――帰レ山隠。〔趙州録中〕問、如何是道場。師云、你従二道場一来、你従二道場一去、――是道場、何処更不レ是。〔祖堂集十鏡清章〕出身猶可レ易、――道還難。

但　ただ～しさえすれば。〔伝心法要十五〕――無二一切心一、即名二無漏智一。

但有　（あらゆる）すべての。「所有」「応有」「但是」「所是」と同じ意味。必ず名詞の上に置かれ、その名詞は必ず主語になる。〔祖堂集七雪峯章〕問、――施為、尽是傍通鬼眼。如何是正眼。師良久。

但使　二字で「もしも」という仮定の意。「但」だけでも仮定用法になり、それに「使」を添えて更にその意を強める。〔二入四行論長巻子〕――有二所解処一、即心有二所属一。

但自　ただひたすら、もっぱら、ひとえに。「自」は軽くついた助字で「みずから」と読んではならない。〔寒山詩〕仏説元平等、総有二真如性一、――審思量、不レ用二閑争競一。

但且　ともかく、何にせよ、ひとまず、という意の俗語。〔寒山詩〕――自省躬、莫レ覓二他替代一。

但是　（あらゆる）「但有」を見よ。唐代ではこれを「ただ」とか「ただし」の意に用いることはない。〔祖堂集十四百丈章〕――一切言教、只明二如今鑒覚性一。〔伝心法要一〕――衆生著レ相外求、求レ之転失。

ち

〜地　①副詞語尾。「暗地」「背地」「驀地」「特地」など。「〜底」に同じ。②一字の動詞に意味のない接尾語として付く。「坐地」「立地」「臥地」

著　①句末にそえて命令を表わす。〔祖堂集五道吾章〕師喚㆓沙弥㆒。沙弥応喏。師云、添㆓浄瓶水㆒―。②動詞の後に用いてその動作の完成を示す。うまく〜し上げる、〜し終わる。〔祖堂集五道吾章〕師問㆓雲嵒㆒、千手千眼如何。嵒云、如㆓無㆑灯夜把㆒―枕子㆒。〔同三南陽慧忠章〕師便索㆓三个鈔羅㆒、盛㆑水―、討㆓蟻子㆒、便抛㆓放水裏㆒。③置く。〔祖堂集十九観和尚章〕師問㆓安和尚㆒、只這一片田地、合―㆓什摩人㆒好。

中間　〜のあいだ。〔趙州録上〕師良久――問、阿那箇是鎮府大王。〔臨済録示衆六〕你莫㆑認㆓著箇夢幻伴子㆒。遅晩――、便帰㆓無常㆒。〔遊仙窟〕俄爾――、擎㆓一火鉢㆒。〔同〕俄頃――、数廻相接。

直→じき。

鎮長　常に。「鎮常」とも書く。〔祖堂集四丹霞章翫珠吟〕百骸俱潰散、一物――霊。

つ

都総　すべて、まったく。〔伝心法要十〕唯知㆑多与㆓児酥乳㆒喫㆖、消与㆑不㆑消、――不㆑知。

都大　すべて、どれも。「大都」という方が一般的。〔古尊宿語録二十五祖録〕昨宵年暮夜、今朝是歳旦、――尋常日、世人生㆓異見㆒。

都不　全然〜しない。「都無」「更不」「並不」などと同じ語法。〔祖堂集二十隠山章〕青山白雲父、白雲青山児、白雲終日依、青山――㆑知、欲㆑知㆓此中意㆒、寸歩不㆓相離㆒。

都無　全然ない。「都不」参照。〔臨済録行録十九〕但有言説、――㆓実義㆒。

都来（ツライ）すべて、ひっくるめて、挙げて、という意の口語。〔宛陵録十〕三千世界――是汝箇自己。〔祖堂集九九峯章〕古人有㆑言、尽乾坤――是个眼。

都盧（ツロ）すっかり、すべて。「都」はすべての意。「盧」は二字の熟語にするため語呂合わせで付いた言葉で、意味はない。〔伝燈録二八無業語〕従前記持憶想、見解智恵、――一時失却。

て

定委　まことに、たしかに、の意。「委」一字でも「まことに」の意に用いられる。〔趙州録下十二時歌〕日入酉、除㆓却荒冷㆒更何守。雲水高流――無、歴㆑寺沙弥鎮長有。

底　①修飾語と名詞を繋ぐ接続詞。〜の。現代語の「的」と同じ。〔祖堂集四薬山章〕師又時問㆑僧、汝諸方行脚来、覓㆓取難㆑得―物㆒来不。〔臨済録示衆六〕你若欲㆓得生死去住脱著自由㆒、即今識㆓取聴法―人㆒。②代名詞・形容詞・動詞の後に用いて、それを名詞化する。やはり現代語の「的」の用法と同じ。〔臨済録示衆一〕你欲㆓得識㆓祖仏㆒麽。祇你面前聴法―是。③「〜地」と同じく副詞の語尾にも用いる。「鮑躬躬底」「恬恬

底」「東東底」「微微底」「驀底」「忽底」など。宋代以後には用いられない。④何と同じ。俗語であるが、唐代では詩のほかにはあまり用いない。（入矢義高『寒山』三五頁）〔寒山詩〕我見二世間人一、堂堂好儀相、不レ報二父母恩一、方寸一模様。〔祖堂集十一雲門章〕黄昏戊、把火尋牛是一物。

転更（うたたさらに）　ますますひどく、〜すればするほどかえって。〔祖堂集三慧忠国師章〕和尚——勿交渉也。〔同十鼓山章〕直下猶難レ会、尋レ言——賒。

と

都→つ

当（はた）　疑問文に用いられた場合は、「一体」「そもそも」と、疑問の語気を添えるに過ぎない。「当に…べけん」と読むのは誤り。「当是何物」なら「一体なんだろう」という意。〔投子録〕問、諸仏出世、為二一大事因縁一。和尚出世、一為二何事一。〔祖堂集四丹霞章〕僧云、可惜許功夫、何不レ選レ仏去。秀才云、仏一何処選。

当応　「応当」に同じ。〔祖堂集十六古霊章〕若然者、一F一西面、遙礼二百又一為レ師。

当下　即時に、その場で、の意。「当時」も直ちにの意に用いられることがある。〔伝心法要三〕不レ如——無心。〔碧巌録七頌評唱〕一文大光銭、買二得箇油糍一、喫二向肚裏一了、——不レ聞レ飢。

当時　「そのとき」という意と、「即座に」「ただちに」という意とがある。〔臨済録行録一〕臨済——得二大愚力一、得二黄檗力一。〔趙州録上〕南泉東西両堂、争二猫児一。泉来二堂内一、提二起猫児一云、道得即不レ斬、道不レ得即斬却。大衆下レ語、皆不レ契二泉意一。——即斬二却猫児子一。

当処　たちどころに、そのまま、その場で、の意の副詞。〔宛陵録十五〕問、如何是出二三界一。師云、善悪都莫二思量一、——便出二三界一。

当頭　①どっと一斉に、たちまちに。〔寒山詩〕財主忽然死、争共——哭。②即座に、その場で。〔趙州録上〕師云、何不二——道著一、更疑二什麼一。

当堂　正面切って、まともに。〔伝灯録十七華厳休静章〕——不二正坐一、不レ赴二両頭機一。

当復（はた）　二字で「いったい」「そもそも」という意。もともと当・復の一字だけでも疑問文ではその意。軽く疑問や反語の語気を添える用法。「そも」と読んでもよい。「為復」を見よ。〔伝心法要十五〕如レ此修行、——何益。

当本　もともと、もとより、元来。〔敦煌本六祖壇経四九〕本来縁レ有レ地、従レ地種花生、——元無レ地、花従二何処一生。

到処　いたるところ、どこでも。〔趙州録中〕問、祖意与二教意一同別。師云、才出家未二受戒一、——問レ人。

到頭　終り、結着、けりがつくこと。また、つまるところ、ひっきょう、という意の副詞にも用いる。〔祖堂集十一惟勁章〕古人有レ言、直得二金星現一、帰レ家始——。〔虚堂録十偈頌〕——曾不レ厭二初心一。

到了　畢竟、つまるところ、結局。「到底」と同義。〔碧巌録七九本則評唱〕――依レ旧不下奈二投子老漢一何上。

～頭　名詞につく接尾語。また副詞の接尾語。「饅頭」「木頭」「石頭」「日頭」「骨頭」「口頭」「拳頭」「心頭」「指頭」「舌頭」「話頭」「問頭」「明頭」「暗頭」「両頭」「前頭」「後頭」「上頭」「下頭」「裏頭」「外頭」「当頭」「幕頭」など。

頭上　最初、初め。〔碧巌録四本則著語〕――大高生、末後大低生。

頭頭　ひとつひとつ、どれもこれも。〔碧巌録二頌評唱〕――是道、物物全真。

登時　「そのとき」と「ただちに」との二義を有する。しかし一般的には後者の意に用いることが多い。「当時」にもこの両様の用法がある。〔祖堂集五大顕章〕――三平造二侍者一在二背後一。〔歴代法宝記下〕弟子有福、――無レ憂。

儻若　もし。〔祖堂集十安国章〕――依二於正令一、汝向二什摩処一会去。

同…一般（…といっぱん）　…と同じ。〔祖堂集十一禾山章〕若撥二無因果一、便―下謗二於般若一、出二仏身血一――。

道　言う。漢代いらいの口語。「導」と区別するため、特に「道」と書く例が唐代には稀にあり、円仁の『入唐求法巡礼行記』などはこの字を頻用する。〔臨済録行録二十〕老和尚―二什麼一。②「見道」「信道」「言道」「説道」「知道」「願道」などの「道」は、意味のない接尾語。従来たとえば「信道」は「道うを信ず」、「知道」は「道うを知る」と誤読されてきた。宋・元のころには更に「看道」「想道」「恨道」「猜道」「教道」「做道」などの語彙が増えた。

式　「太」に同じ。ひどく、はなはだ。〔虚堂録六〕却笑謝郎眉―堅。

式煞　はなはだ。→「太煞」〔碧巌録一頌評唱〕此是雪竇――老婆、重重為人処。

式曶　「式煞」に同じ。〔八方珠玉集中〕九峯――老婆心。

得　①宜しい、それでよい、という意。この場合には、得られるとか、できるとかいう意味はない。〔祖堂集六洞山章〕問、蛤中有レ珠、蛤還知不。師曰、知則失。僧曰、如何則―（どうしたらよろしいでしょうか）。師曰、莫依二前言一。〔唐国史補上〕奴見二官人一不レ下レ馬、打也―、不レ打也得。官人打了、去也―、不レ去也―。②動詞の後に付いて、可能・完成をあらわす。「道得」「接得」など。

得恁麼…　よくもまあそんなことをした、よくもまあ…なことだ、よくもそんな…ができたものだ。〔睦州録〕一日睦州刺史問、如何是禅宗事。師云、近前来、近前来。史近前。師云、―二――脱空妄語一。「得与麼」も同じ。

…得否　宜しいか。「得てんや」と訓じる習わし。〔宛陵録十四〕若無心行二此道一、―否。

得不（えたるや）「…得摩」に同じ。宜しいか。〔祖堂集四薬山章〕学人学二和尚一看レ経、得不（私も和尚さんにならって経を読みますが、よろしいですか）。

…得摩（えたるや）　宜しいか。従来「…得るや」と読んだの

は誤り。例文参照。〔祖堂集七巌頭章〕峯云、什摩処去。対云、湖南去。峯云、我有二同行一在レ彼、付二汝信子一、――（私にはあそこに修行仲間がいる、君に手紙をことづけてもよいか）。僧云、得（けっこうです）。

特地　とりわけ、わざわざ。〔祖堂集十鼓山章〕直下猶難レ会、尋レ言転更賒、擬レ論二仏与レ祖、――隔二天涯一。〔碧巌録五本則評唱〕古人――做作、教二後人依二規矩一。

な

那　その、あの。近称の「這」に対して遠称。〔祖堂集九烏巌章〕任汝世界爛壊、――人亦不レ採レ汝。②疑問詞。どうして。どの。〔寒山詩〕身上無二塵垢一、心中――更憂。③句末にそえて、軽く同意をうながす語気を表わす。〔臨済録勘弁十四〕師問二杏山一、如何是露地白牛。山云、吽吽。師云、啞――。

那何　「奈何」に同じ。〔祖堂集七夾山章〕一句子、天下人不二――一。

那敢　「何敢」に同じ。〔祖堂集十七芙蓉章〕和尚若道、――不レ信。

那箇　①それ、あれ。その、あの。〔伝灯録六石鞏章〕僧到礼拝。師云、還将二――一来否。〔祖堂集十七岑和尚章〕至二明日一、三聖問訊曰、昨日答二――一師僧二一転因縁、只是光前絶後、古今罕レ聞。②どれ。どの。〔趙州録上〕未審両箇、――是衆生。…**那作摩**　句末の「作摩」にほぼ同じく詰問の語気を添える。〔祖堂集十四百丈章〕師謂レ衆曰、是你諸人患顚――。

那堪　「何堪」に同じ。〔祖堂集四丹霞章孤寂吟〕此物――為二大用一。

那頭　どちら。また、あちら。「那辺」と同じ。〔趙州録下〕有二俗行者一到レ院焼香。師問レ僧、伊在二那裏一焼香礼拝、我又共レ你在二者裏一語話。正与麽時、生在――。僧云、和尚是什麽。師云、与麽即在二――一也。云、与麽已是先也。師笑レ之。

那得　…していいのか（いけないのではないか）。「何得」に同じ。〔祖堂集十玄沙章〕雪峯見レ他来、問レ師、教你去二江西一、――与摩廻速乎（江西に行かせたのに、そんなに早く帰って来ていいのか）。〔同十四大珠章〕師云、如来者則諸法如義。大徳――不レ知（知らないでは済みませんぞ）。

那辺　あちらがわ。「這辺」に対する。現実の次元を越えた世界、〈本来の家郷〉を指す場合がある。また疑問詞として「どちら」「どちらがわ」の意。〔祖堂集六洞山章〕師曰、此猶是這辺事。――事作摩生。〔同七巌頭章〕要下過二――一去上。

那裏（裡）　「這裏」に対する語で、あそこ、あちら。また「那」を上声に読めば、どこという疑問詞になる。〔趙州録下〕師問レ僧、伊在二――一焼香礼拝、我又共レ你在二者裏一語話。〔祖堂集四投子章〕趙州到二投子一。山下有レ鋪、向レ人問、投子――。

乃至～　～でさえも、～すら。経典での普通の用法では、一連の諸例を列挙する場合、中間の例を省略して最後の例に言及する時にこの語を用いるが、これはそれの変化した用法。〔百丈広録〕若能与麽、不レ論二堵梯勝劣一。――蟻子之身、但能与麽、尽是浄妙国土、不可思議。〔碧巌録五頌評唱〕及二乎春来一、

幽谷野澗、――無レ人処、百花競発。

に

…尼　「麼」に同じ。〔祖堂集四薬山章〕師問二雲岳一、作二什摩一。対曰、担レ水。師曰、那个―。対曰、在。

…你　「麼」に同じ。〔祖堂集十六南泉章〕師問二黄檗一、笠子太小生。黄檗云、雖レ然小一、三千大千世界、惣在二裏許一。師云、王老師―。黄檗無レ対。

…麼　詰問の語の余声。何かを指し示すことによって反問したり、それへの注意を促したりする問投詞。「尼」「咋」「你」とも書く。〔龐居士語録〕士曰、背後底―。

入麼　「与麼」に同じ。〔古尊宿語録二四神鼎録〕汝道、――去底好、――来底好。

如…一般　…と同じ。〔祖堂集十一禾山章〕亦―二樹果一――、方為二称断一。

如…許　…ばかり。〔祖堂集十三招慶章〕如何是絶塵之行。師云、我若将下一法―二微塵一―上、与レ汝受持則不レ得レ絶。〔同山谷章〕若更見下一法―二総髪一―上、不二是此个事一。

如…相似　…のようである。〔祖堂集十九香厳章〕直須―レ地―安然不動。（大地のように安然不動でなければならない）

如許多　こんなに多くの、たくさんの。〔祖堂集十四馬祖章〕師問レ僧、従二什摩処一来。対云、従二淮南一来。師云、東湖水満也未。対云、未。師云、――時雨、水尚未レ満。

如今　いま。「而今」ともいう。〔臨済録示衆八〕你――応用処、欠二少什麼一。

如似　「如」と「似」の複合したもの。〔祖堂集十三報慈章〕仏教祖教―二―怨家。

如若　もし。〔祖堂集十五亀洋章〕――却二復故山一、乞収レ気。

ね

寧可　むしろ、いっそ…しようとも。後に必ず「…しない」という拒否の表示がつづく。〔祖堂集四石頭章〕――永劫沈論、終不レ求二諸聖出離一。

寧自　むしろ。「自」は意味のない接尾語。〔祖堂集七雪峯章〕――砕レ身如二微塵一、終不二敢瞎二却一个師僧一。

寧当（むしろ…せん）　むしろ…したい。「当」は意味のない接尾語。→「寧可」〔祖堂集九九峯章〕――截レ舌、不レ犯二国諱一。

は

把　①つかむ、手にとる。〔祖堂集十安国章〕又因一日、峯見レ師、便攔レ胸―云、尽乾坤是个解脱門、―レ手拽教二伊入一、争奈不レ肯レ入。②…を。他動詞の前に目的語を置くとき、その目的語の上に冠する。「将」にもこの用法がある。〔趙州録中〕師云、離二四句一、絶二百非一、―二什麼一指示。

叵耐　がまんならぬ、けしからぬ。〔遊仙窟〕五嫂罵曰、可由――。〔睦州録〕師見二新到来参一云、剋尤――（剋尤は可由と同音通用）。

耐耐　同前。〔趙州録下十二時歌〕攢眉多、称心少、――東村

黒黄老、供利不二曾将得来一、放レ驢喫二我堂前草一。〔大慧書答富枢密第一書〕毎毎思量、直是――。

波吒　苦労する。あくせくする。〔山僧歌〕（敦煌文書S五六九二a）鑊湯并碓磑、受レ罪人人見二閻老一、仮饒地獄歴二多年一、只為二――一不レ肯レ了。

…婆　現代中国語の「吧」に相当する語気詞。〔祖堂集七雪峯章〕脚根不レ踏二実地一――。

莫→まく

ひ

比擬　～しようとする。「擬欲」と同じ。〔祖堂集十一斉雲章〕――理レ国、却令二家破一。

比来　近来、近ごろ、という意のほかに、さきほど、の意にも用いる。〔趙州録上〕師上堂云、――無事、更問レ禅問レ道。〔祖堂集十八趙州章〕院主請二上堂一。師昇座、唱二如来梵一。院主云、――請二上堂一、這个是如来梵。師云、仏弟子唱二如来梵一、不得麽。

…否　句末について疑問を表わす。「…不」「…未」「…無」「…也無」などと同じ。〔祖堂集四石頭章〕思曰、你去二譲和尚処一達レ書、得―。対曰、得。

彼中　あそこ。これに対して近称は「此中（ここ）」。〔祖堂集五道吾章〕師下レ山到二五峯一。五峯問、識二――老宿一不。〔伝灯録十五洞山章〕有レ僧問、和尚於二先師処一得二何指示一。師曰、雖レ在二――一、不レ蒙二他指示一。

非但　～だけではない。〔伝灯録六杉山章〕一日、普請択二蕨菜一。南泉拈二起一茎一云、這箇大好二供養一。師云、――這箇一、百味珍羞、他亦不レ顧。

非論　～は言わずもがな、～はもとより。〔祖堂集十五龐居士章〕偈曰、――レ二菩薩道一、仏亦不レ要レ成。

被…（…らる）　受身を表わす助字。〔祖堂集十四馬祖章〕忠国師云、欽師又――二馬師惑一。〔臨済録示衆十〕――二他問一著仏法一、便即杜レ口無レ詞。

被…所…　受動態を表わす句法。〔祖堂集十九倶胝章〕師歎曰、我是沙門、――二尼衆一レ笑（私は沙門なのに尼衆に笑われた）。

必須　かならず…せねばならない。〔祖堂集六宗密章〕問曰、云何是道、何以修レ之。為復――二修成一、為復不レ仮二功用一。

畢竟　結局、とどのつまりは。〔臨済録行録十七〕――作麽生。

百不～　強い否定を表わす。「百不解（てんで能がない）」「百不憂（全く心配しない）」などの用例がある。〔寒山詩〕不レ如――解、静生絶二憂悩一。〔雲門広録上〕問、――会底人来、師如何接。

百無～　まったく無い。「百不～」と同じく、強い否定を表わす。〔歴代法宝記〕和上云、修二行般若波羅密一、――レ所レ須。

憑何　何を頼りにして、何の手がかりで。〔祖堂集九九峯章〕既不レ借二三光勢一、――レ喚作二乾坤眼一。

ふ

…不　句末について疑問を表わす。「否」「未」「無」「也無」な

どと同じ。〔祖堂集十五西堂章〕有二一秀才一問曰、有二天堂地獄一―

不敢　どういたしまして、という挨拶の語。謙遜して言う場合とそうでない場合とがある。〔伝灯録八亮座主章〕馬祖問曰、見説座主大講二得経論一、是否。亮云、――。

～不起　接尾語「～起」のついた動詞に「不」が挿入された形で、不可能を表わす。たとえば「提起」が「提不起」になると、「提起しない」ではなくて「提起できない」の意になる。同じ語法にしたがうものに「～不見」「～不到」「～不動」「～不得」「～不住」「～不成」「～不出」「～不尽」「～不折」「～不入」「～不徹」「～不著」「～不聞」「～不満」「～不落」「～不了」「～不応」などがある。

不及　百パーセント～し切れない、という意を表わす。〔臨済録示衆五〕道流、大丈夫児今日方知二本来無事一。祇為二你信一レ一、念念馳求、捨レ頭覓レ頭、自不レ能レ歇。〔龐居士語録〕山曰、不レ是、翁今日還道―レ―。

不錯　たしかに、の意。〔祖堂集十長慶章〕―レ―嫌レ麁。

不須　当然～してはならない。～する必要はない。〔趙州録中〕止止―レ―説、我法妙難レ思。〔伝灯録三十南嶽懶瓚和尚歌〕兀然無事無二改換一、無事何須レ論二一段一。直心無二散乱一、他事―レ―レ断。

～不著　～しおおせない、うまく～し上げえない。〔祖堂集六投子章〕焼亦焼――。

不得　①だめだ、という意。〔趙州録中〕問、撥レ塵見レ仏時如何。師云、撥レ塵即不レ無、見レ仏即―レ―。②動詞の後に付く場合には不可能の意を表わす。〔臨済録勘弁十二〕徳山垂示云、道得也三十棒、道―レ―也三十棒。③動詞のうえに付いて禁止を表わすことがある。「…するを得ざれ」と訓む習わし。〔臨済録行録二一〕師臨二遷化一時、拠坐云、吾滅後―レ―レ滅二卻吾正法眼蔵。

不妨　禅録に多く見られる用法は「～しても差支えない」という許容を意味するのではなく、むしろそのことを賞揚して「なかなかの～だ」「大した～ぶりだ」と讃えた言い方である。『碧巌録』の著語に特にその例が多い。〔龐居士語録〕―レ―滅二人声価一。〔碧巌録十四本則評唱〕―レ―奇特。（はなはだ奇特だ、いかにも奇特だ）。

不昧　不明確ではない、という消極的な意味ではなく、逆にその明確さを強く表明する言い方。入矢義高『龐居士語録』二三頁参照。〔伝灯録三十五台山鎮国大師澄観答皇太子問心要〕無住心体、霊知―レ―。〔無門関二〕大修行底人、還落二因果一也無。師云、―レ―因果一。

不用　～する必要はない。〔祖堂集十四南源章〕師機望二見洞山一、便云、已相見了也、―レ―更上来一。

復　疑問詞を伴って疑問の語気を表わす。「はた」と訓ずればよい。いったい、そもそも。〔祖堂集九九峯章〕問、祖祖相伝、―伝二何法一。（祖々相伝して、いったいどんな法を伝えているのですか）②意味のない語助。「為復」「亦復」「雖復」「時復」「還復」など。

へ

並皆　すべて、みな。〔祖堂集十四百丈章〕善与二不善一世間一切諸法、――放却、莫二記憶一、莫二縁念一。

並総　すべて、みな。〔祖堂集一釈迦牟尼仏章〕時天王各捧二石鉢一。其時菩薩、為二平等一故、――受レ之。

並頭　いっしょに。〔祖堂集四薬山章〕師曰、你来去為二阿誰一。対曰、替レ渠東西。師曰、何不レ教二伊――行一。

並不　並は強辞。「更不」「曽不」と同じ。〔臨済録示衆十〕真仏無形、真法無相。你祇麽幻化上頭、作レ模作レ様。設求得者、皆是野狐精魅、――二是真仏一、是外道見解。

並無　並は強辞。「更無」「曽無」と同じ。〔祖堂集十六南泉章〕師有二一日一、法堂上坐。忽然喝一声。侍者驚訝、上二和尚処一看、――レ人。

別更　ことあたらしく、ほかに、それ以上。〔祖堂集十五汾州無業章〕馬大師曰、迷即是衆生、悟即是仏道。不下離二衆生一、――有上仏也。

別是　未体験の世界に始めて接した時などの感銘を表白する語。〔伝灯録二二報恩行崇章〕問、丹霞焼二木仏一、意作麽生。師曰、時寒焼レ火向。曰、翠微迎二羅漢一、意作麽生。師曰、――一家春。

～辺　「～家」というのに同じで、～のがわ、～の次元、～の立場、という意。「西辺」「東辺」「父辺」「仏辺」「功勲辺」などと用いる。

便即　「便」に同じ。すぐに、とたんに。〔伝心法要十一〕纔有二道理一、――心異。

便当　①すんなりと、おだやかに。〔祖堂集十三竜潭章〕示二誨遺誡諸徒一、則以二子時一、――順レ寂。②すんなりと片付ける、それでよいと済ませてしまう。…と短絡する。〔伝灯録十八玄沙章〕莫下把二瞌睡見解一――却去上。

ほ

方始　はじめて、やっと、ようやく、の意。また、やっと～しはじめたばかり。〔祖堂集十五汾州無業章〕本将謂仏道長遠、懃苦曠劫、――得レ成。〔趙州録下〕師因到二臨済一、――洗脚、臨済便問、如何是祖師西来意。

放　①ゆるす、放っておく、好きなようにやらせる。〔睦州録〕――二你三十棒一、自領出去。②置く。〔祖堂集五三平章〕亀毛払、免角杖、拈将来、随処――。③使役。～させる。〔祖堂集十鏡清章〕若是与摩人、――二他出頭一始得。

ム甲　「某甲」に同じ。

某甲　それがし、なにがし。「ム甲」とも書く。

某専甲　なにがし。〔祖堂集十六潙山章〕老僧死後去二山下一、作二一頭水牯牛一、脇上書二両行字一云、潙山僧――。

傍家　「家」は意味のない副詞語尾。横道、わきみちにそれて、本筋からはなれて。〔臨済録示衆十〕你擬二――波波地学得一、於二三祇劫中一、終帰二生死一。〔伝灯録十九保福章〕莫二――取二人処分一。

本自　本来、もともと。「自」は語助。〔祖堂集十五無業章〕今日始知法身実相――具足。

ま

…摩（麽）　①句末について疑問を表わす。宋代いごは「麽」と書かれる。句頭に疑問詞をともなうことも多い。「還…摩」「莫…摩」「莫是…摩」「豈是…摩」など。②また推測を表わす。〔祖堂集四丹霞章〕馬祖便察レ機、笑而日、汝師石頭―。〔雲門広録上〕驢年会―。

毎常　日ごろ、いつも。〔祖堂集三牛頭章〕融――望二雙峯山一頂礼、恨レ未レ得二親往面謁一。

埋頭　ひたすら、わき目もふらず。〔寒山詩〕癡福暫時扶、――作二地獄一。〔圜悟心要下示禅者〕不退不転、――向前。

莫　①禁止に用いる（文語）〔伝灯録八汾州無業章〕凡学者致レ問、多答レ之云、―二妄想一。②「無」に同じ。〔祖堂集十六南泉章〕這後生―レ礼。③推測に用いる。「莫…不」「莫…麽」「莫…否」「莫…也無」。この文例では「莫是」とする場合も多い。

莫…好（…なる（する）ことなくんばよし）　…しないように。勧奨の気分を含んだ禁止。〔祖堂集八疎山章〕―二無慙愧一―。〔同十一禾山章〕―二取次一―。

莫…否　…ではあるまいか。〔祖堂集十八仰山章〕我難後到二潙山一、得二一日問レ我、汝在二仰山一住持及説法、―レ誑二惑他人一――（他人をたぶらかしていはしないか）。

莫…不　同前。〔祖堂集五長髭章〕石頭曰、―レ要二点眼一――（点眼したいのだな）。対曰、便請点眼。

莫…摩　同前。〔祖堂集十五東寺章〕与摩相見、―二不当一――（そのように相見することは不当なんですね）。

莫是…不　…ではあるまいか。…なのか。〔祖堂集十四馬祖章〕師云、――師子児―。座主云、不敢。

莫是…摩　同前。〔祖堂集十八趙州章〕有レ人問二老婆一、趙州路什摩処去。婆云、驀底去。僧云、―二西辺去一―。婆云、不レ是。僧云、―二東辺去一―。婆云、也不レ是。

莫是…以不　同前。〔祖堂集十五帰宗章〕師云、――俊機白侍郎――。対云、不敢。

莫道～　～は言わずもがな、～は知れたこと。〔祖堂集七雪峯章〕―レ―二是骨一、皮也不識。〔同八雲居章〕―レ―二蹤跡一、気也不レ識。

莫不…摩　推測の句法。…ではあるまいな。〔祖堂集十一斉雲章〕師上堂、偏立告云、―レ―レ要レ昇二此座一――（この座に昇りたいのではあるまいな）。〔同龍光章〕―レ―二辜負一――（辜負するのではなかろうか）。

莫便是…也無　推測の句法。〔祖堂集八曹山章〕昇得者、―二――座上人一――（昇りうる者が座上の人なのではあるまいか）。

驀　まっこうから。また、忽ち、急に、いきなり。〔祖堂集十八仰山章〕―呼二於学人名一。学人応諾。

驀忽　にわかに、とつぜん。〔龐居士語録〕居士一日在二茅廬裡一坐、――云、難難難、十碩油麻樹上攤。

驀直　まっ直ぐに、一直線に、わき目もふらず。〔伝灯録二十七〕昔有三僧一雲遊、擬レ謁三径山和尚一。遇二一婆子一。時方レ収レ稲次、一僧問曰、径山路何処去。婆曰、――去。

驀地　ぱっと、まっしぐらに、真っ直ぐに。〔祖堂集十一斉雲霊照章〕師有時上堂、――起来、伸レ手云、乞三取些子一。乞三取皴子一。

驀底　「驀」に同じ。〔祖堂集十七大慈寰中章〕師行脚時、三人同行、逢三見女人収レ稲次問、退山路何処去、女人云、――去。

驀便　いきなり、ぱっと。〔祖堂集五船子章〕師以三船槁一――撞。

末後　最後、ぎりぎり決着のところ。〔祖堂集九大光居譲章〕問、保任底人失二一念一時如何。師云、始得三常在一。僧曰、作二大魔王時一如何。師云、暫時間。僧曰、――事如何。師云、不レ在三者裏一。

末上　最初に、まっ先に。〔趙州録上〕崔郎中問、大善知識還入二地獄一也無。師云、老僧――入。崔云、既是大善知識、為二什麼一入二地獄一。師云、老僧若不レ入、争得レ見二郎中一。〔祖堂集十一光睦行修章〕有レ人問、如何是和尚――一句。師云、如今覚二什摩一。

末頭　「末上」に同じく最初に、まっ先に、の意。〔続灯録六相国正覚章〕問、如何是仏法大意。師云、鹿野苑中談二四諦一。僧曰、未審意旨如何。師云、――先度二五倶輪一。

み

未　句末について疑問を表わす。「不」「否」「無」「也無」などと同じ。従来「未だしや」と訓ずる。〔祖堂集十七処微章〕和尚還曾見―。

未在　いまだし！　まだだ、まだ不十分だ。「在」は句末にあって断言的口調を表わす助辞。〔祖堂集十一保福章〕招慶因挙、古人道、金屑銀屑雖レ貴、肉眼著不レ得、豈況法眼乎。招慶拈問レ師、只如三著不レ得、還著得摩。師対云、――更道。

未審　「いぶかし」と訓みならわす。まだ詳しくは知らないの意で、人にものをたずねる時に、どういうことでしょう、いかがでしょうの意味に用いる。〔臨済録示衆十三〕問、大通智勝仏、十劫坐三道場一、仏法不二現前一、不レ得レ成二仏道一。――此意如何。乞師指示。

む

無　句末について疑問を表わす。「不」「否」「未」「麼」「摩」「也無」などと同じ。〔祖堂集四薬山章〕侍者便認三得家兄一、便把レ手啼哭云、嬢在―。

無端　とっぴょうしもなく、〔祖堂集五道吾円智章〕和尚打レ鼓本分、新到因二什摩一――打レ鼓〔雲門広録下〕和尚――作麼。

無奈…何　…をどうしょうもない。〔祖堂集八曹山章〕他家差別知解、―下―二闌梨一―上。

も

勿　「無」「没」に同じ。

勿奈何　「無奈何」に同じ。

没　「無」の意。〔臨済録示衆十〕学人若眼定動、即―交渉。

聞早　はやめに、はやいうちに。敦煌変文にも幾つか用例がある。〔少室六門心経頌〕若要二心無レ苦、――悟二菩提一。

や

也　文語の「亦」に同じ。〔臨済録勘弁十二〕道得―三十棒、道不レ得―三十棒。〔同行録十七〕老漢話頭―不識。〔祖堂集四石頭章〕和尚―須レ道二取一半一、為二什摩一独考二専甲一。

…也未　句末について疑問を表わす。「也無」「以不」「已不」などと同じ。旧訓は「また未だしや」であるが、この二字で「や」と訓めばよい。〔祖堂集十四馬祖章〕喫レ飯―。

…也無　句末について疑問を表わす。「以不」「已不」・也未」などと同じ。「…や也た無しや」と読むのは誤り。〔無門関第一則〕狗子還有二仏性一――。〔祖堂集十六南泉章〕師云、実――。対云、実也。

亦　ふつうの意味のほかに、①「一」と同じ意に用いる。～するや否や。〔祖堂集十六黄蘗章〕我―見二汝行脚人入レ門、便識二得汝一了也。②「雖」の意。〔祖堂集三司空山本浄章〕―レ知レ如レ在レ夢、睡裏実是閙。

亦復　「復」は意味のない接尾語。

ゆ

又復（また）　復は接尾語だから、重ねて「また」と訓む必要はない。「亦復」も同じ。〔祖堂集十一禾山章〕問、古人有レ言、擬レ心則差、況復有レ言、只如レ不レ擬、――無レ言時如何。

有→う

猶自　「猶」に同じ。「自」は意味のない接尾語。古く羅什の訳経では「猶故」を用いるが、唐代からはこれに変わった。「尚自」ともいう。〔張籍、患眼詩〕昨日韓家後園裏、看レ花――未二分明一。

よ

～与　①動詞のあとについて「与える」という意を添える。「過与」「分付与」「送与」「売与」など。②意味のない副詞語尾。「好与」「早与」「連与」「快与」

与麼（よも）　本来は「そのように」「このように」の意の副詞であるが、時として「そのような」「このような」の意の形容詞にも用いられる。「与没」「与摩」「異没」「伊没」などとも書かれる。〔臨済録上堂六〕若――来、恰似二失却一、不二――来一、無縄自縛。〔同行録八〕豈有二――事一。

要　①～しょうと思う、～したい。〔祖堂集十六南泉章〕師示レ衆曰、王老師―売レ身、阿誰買。②～せねばならぬ。〔臨済録示衆一〕今時学二仏法一者、且要レ求二真正見解一。

要且　要するに、つまるところ、ともかく。〔臨済録勘弁二三〕打即任レ打、――無二祖師意一。

要須（ほっす）　～したいと思う。「～ねばならぬ」（須要）と同義に用いることもある。〔祖堂集三慧忠国師章〕幸自何怜

生、一ニ一得二个護身符子一作二什摩一。

容易　心易く、おいそれと、安直に、の意。〔龐居士語録〕莫レ怪二適来一——借問一。

容可　…してもかまわぬ（当然）、…することは有り得る。〔南陽和尚問答雑徴義〕問、諸子不二自知一、——二門外索一。父応レ知二子得一、何須二更与レ事一。

欲擬（ほっす）　…しょうとする。「擬欲」ともいう。〔祖堂集十一保福章〕雪峯云、還会摩。師一ニ一近前一。

欲似　「似」に同じ。〜のようだ。「欲」に意味はない。〔祖堂集七巌頭章〕者阿師一ニ一一个行脚人一、私記在レ懐。

欲得　この二字で「欲す（…したいと思う）」の意。従来これを「…を得んと欲す」と読むのは誤り。〔伝心法要四〕学道人若一ニ一成仏一、一切仏法、総不レ用レ学、唯学二無求無著一。

ら

〜来　①或る動作を進行させる意志を表わす助字で、「〜去」と反対の方向性をもつ。…に来る。〔祖堂集十五金牛章〕菩薩子喫飯一。〔趙州録上〕泉云、記取一、喚二水牯牛一浴。…泉云、将二得縄索一一不。②動作の現在完了を表わす。〜していた、〜して来た。〔臨済録行録一〕黄檗問、什麽処去一。師云、昨奉二慈旨一、令レ参二大愚一去一レ。

〜来〜去　動作の反復をあらわす。〔祖堂集三牛頭法融章〕禅師自往看二四祖一、乃往二庵前一過一過一。〔同十七西院大安章〕侵二犯人苗稼一則鞭打、調一伏一。

頼（さいわいに）　運よく、都合よく。〔趙州録上〕問、如何是玄中玄。師云、玄来多少時世。学云、玄来久矣。師云、一遇二老僧一、洎合玄二殺這屠生一。

頼是（さいわいに）　うまい具合に、都合よく。〔龐居士語録〕——無二人見一。

落後　あとで、のちほど。〔祖堂集五投子章〕師便帰レ山。趙州——到投子、便問……。

欄　まっこうから、ずばりと。「欄胸」「欄面」などという時の「欄」と同じ。〔碧巌録二一本則評唱〕一問一答、不妨奇特。

り

〜裏　〜のなか、〜のうち。「里」「裡」とも書く。〔祖堂集三一宿覚章〕老宿帰二房一一喫レ茶。〔伝灯録十一香厳章〕闊髏一眼晴。

裏許　なか、うちがわ。そとを「外許」というのに対する。〔伝灯録十六九峯章〕承古有レ言、尽乾坤都来是箇眼。如何是乾坤眼。師曰、乾坤在二——一。

裡許　同前。〔大慧書答曾侍郎第二書〕而今参学之人、不レ知二是病一、只管在二——一頭出頭没。

裏頭　なか、うち。〔祖堂集五雲嵒章〕問、如何是正修行路。師云、修是墻塹、不修是——人。

立地　「地」は意味のない語助で、単に「立つ」という意。地に立つと読んではならない。同じ構造の語として「坐地」「臥地」がある。また「たちどころに」の意の場合は「地」は副

詞語尾。〔祖堂集五雲嵒章〕洞山来、不審――。〔大慧書答宗直閣書〕広額屠児、在二涅槃会上一、放二下屠刀一、――便成仏。

了　動詞について完了を表わす。

良久　なにほどかの時間の経過をいうが、禅録においては、問答あるいは上堂説法において示される沈黙の時間を、この語によって表わす。〔伝灯録五光宅忠章〕三蔵――、罔レ知二去処一。師叱曰、這野狐精。〔雲門広録上〕上堂、――云、還有二人道得一麼。

れ

劣　わずかに、やっと。〔寒山詩〕蓬菴不レ免レ雨、漏榻―容レ身。

ろ

驢年　道忠和尚は言う、その時期がないことをいう。つまり子丑寅卯などの年はあっても、驢と名づける年はないからである、と（葛藤語箋五）。しかしこの説は、十二支の動物にないものとしてなぜ特に驢が選ばれたかの説明がないから、説得力に欠ける。驢は犬と並んで最も蔑視され、好んで人を罵る語に用いられる。驢年とはロバの齢（よわい）、いくら年を重ねても発展のない無意味な生涯に喩える。〔祖堂集十一雲門章〕師問レ僧、一切声是仏声、一切色是仏色。拈却了、与レ你道。対云、拈却了也。師云、与摩――去（ロバのように年を取って行くがいい。お前にはてんで見込みがない）。

老～　接頭語。姓名、称呼のほか、いくつかの動物名の前につく。「老婆」「老公」「老漢」「老君」「老兄」「老師」「老婆子」「老大漢」「老大人」「老鼠」「老鴉」「老虎」など。

浪自　みだりに。「自」は意味のない接尾語。〔寒山詩〕徒労説二三史一、――看二五経一。

論勃　永久に。未来永劫に。常に副詞として用いられる。「論」は「論情（まことにもって、実に）」の場合の「論」と同じく、副詞の接頭語と見なしてよい。俗語。〔伝灯録二一安国慧求章〕問、如何是大庾嶺頭事。師曰、料レ汝承当不レ得。僧曰、重多少。師云、這般底――不二奈何一。〔臨済録上堂八〕有二一人一――在二途中一、不レ離二家舎一。

わ

和～　～もろとも。現代語の「連」に当る。〔碧巌録八本則著語〕只贏得眼睛也落レ地、―鼻孔一也失了上。